

令和5(2023)年度

研究のまとめ

進んで自分の思いや考えを表現する力を育てる
～書く活動を通して～



大阪市立東井高野小学校

はじめに

新しい学習指導要領全面実施4年目が終わろうとしています。学習指導要領では「一人ひとりの児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的变化を乗り越え、豊かな人生を切り抜き、持続可能な社会の創り手となることができるようになることが求められている」と示されています。

また、大阪市教育振興基本計画は令和4年度より基本理念を「すべての子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力を備え、健やかに成長し、自立した個人として自己を確立することをめざします。あわせて、グローバル化が進展した世界において、多様な人々と協働しながら持続可能な社会を創造し、その担い手となることをめざします。」とし、以下の3つの最重要目標を定めています。

1. 安全・安心な教育の推進
2. 未来を切り拓く学力・体力の向上
3. 学びを支える教育環境の充実

令和3年度から研究教科を国語科とし、今年度は

進んで自分の思いや考えを表現する力を育てる
～書く活動を通して～

を研究主題とし、研究の視点として以下の3点としました。

- ① 基礎基本となる「ことばの力」を育成するための工夫
 - ・文字や語彙、文法、音読などの基本的な事柄を身に着けるための取り組み。
 - ・ことばによるコミュニケーションの基盤となる力を育てるための工夫や取り組み。
- ② 自らの考えを根拠を持って書くことができるための工夫
 - ・本文の中から自分の考えの根拠を見つけるための工夫。
 - ・相手意識を持った表現や伝え方の工夫。
- ③ 自分の考えを深めるための振り返りの工夫
 - ・児童が本時で「どのような力が身についたのか」「他の児童の良かったところは、どこだろうか」「他の児童の考えを聞いてどう思ったのか」など、明確な目的意識を持った振り返りの取り組み。また、自分の考えがどう深まったのかを表現するための工夫。

本校は、全国学力・学習状況調査や大阪府新学力テスト、大阪市小学校学力経年調査から「主体的対話的で深い学び」を実現するための学力向上が喫緊の課題です。全ての教科の根源となる国語科の授業研究・討議を深め、さらに、「大阪市子ども読書活動推進計画」との整合性も図り、教職員の力を結集し、大阪市教育振興基本計画の基本理念が達成できるよう研究に邁進する所存です。

令和6年3月

大阪市立東井高野小学校

校長 北代 聰

目次

はじめに

I. 研究の概要

1. 研究主題	3
2. 研究主題設定の理由	3
3. 研究の視点	4
4. 研究の組織	5
5. 研究の計画	6

II. 各学年の取り組み

1. 第1学年	7
「おもい出してかこう」	
2. 第2学年	15
「お手紙」	
3. 第3学年	23
「サーカスのライオン」	
4. 第4学年	32
「ごんぎつね」	
5. 第5学年	40
「和の文化について調べよう」	
6. 第6学年	49
「インターネットの議論について考えよう」	
7. なかよし(特別支援学級)	57
「給食の献立を考えよう」	

III. 研究のまとめ

1. 研究の成果	62
2. 今後の課題	62

おわりに

I 研究の概要

I. 研究主題

進んで自分の思いや考えを表現する力を育てる
～書く活動を通して～

2. 主題設定の理由

本校は、国語科を研究教科として実践を進めて3年目に入る。初年度は「主体的に考え、意欲をもって共に学び合う子どもを育てる」と主題を設定し、説明的な文章を読み取る学習を中心に対話的な活動を取り入れた研究に取り組んだ。その結果、要旨のとらえ方や要約の仕方を身につけることができた。しかし、対話的な学びに積極的に取り組もうとする児童の姿は見られるものの、その活動に充分な時間をかけることができなかった。そのため、昨年度は「深い学びにつなげるために～対話的な学びを通して～」と主題を設定し、対話的な活動をより重視することにした。対話の時間を確保するために、授業のスリム化を図ることなどを工夫に取り組み、児童の自分の意見やその根拠などを端的に説明する力につなげることができた。同時に次のような課題も見つかった。

- ・相手意識をもった伝え方の工夫が必要
- ・“どういう振り返りにするのか”を明確に持つ必要がある。

そこで今年度は、対話的な学びを活用した確かな読みをもとに、進んで表現できる力を子どもについてことで、さらに深い学びにつなげることに研究の焦点を当てることとした。

本校の児童は、これまでの実践を通して、話すことで課題に対して考え方や意見伝えることはできるようになってきている。「書く」ことへの苦手意識を持つ児童を多く抱えるが、今までの取り組みにより対話を通じて伝え合う経験を重ねたからこそ、次は、書く活動による伝え合いが大切になると考える。また相手意識を持った伝え方の工夫が、さらなる書く活動の充実につながることになる。そして、明確な目的をもった振り返り活動により、児童一人ひとりがその時間に学習したことに対して自分の考えを深めることができる。さらに、その積み重ねが自己肯定感となり、確かな学力への足掛かりになると見える。そのために今年度は以下の視点を持って研究を進めていく。

3. 研究の視点

①基礎基本となる「ことばの力」を育成するための工夫

- ・文字や語彙、文法、音読などの基本的な事柄を身に着けるための取り組み。
- ・ことばによるコミュニケーションの基盤となる力を育てるための工夫や取り組み。

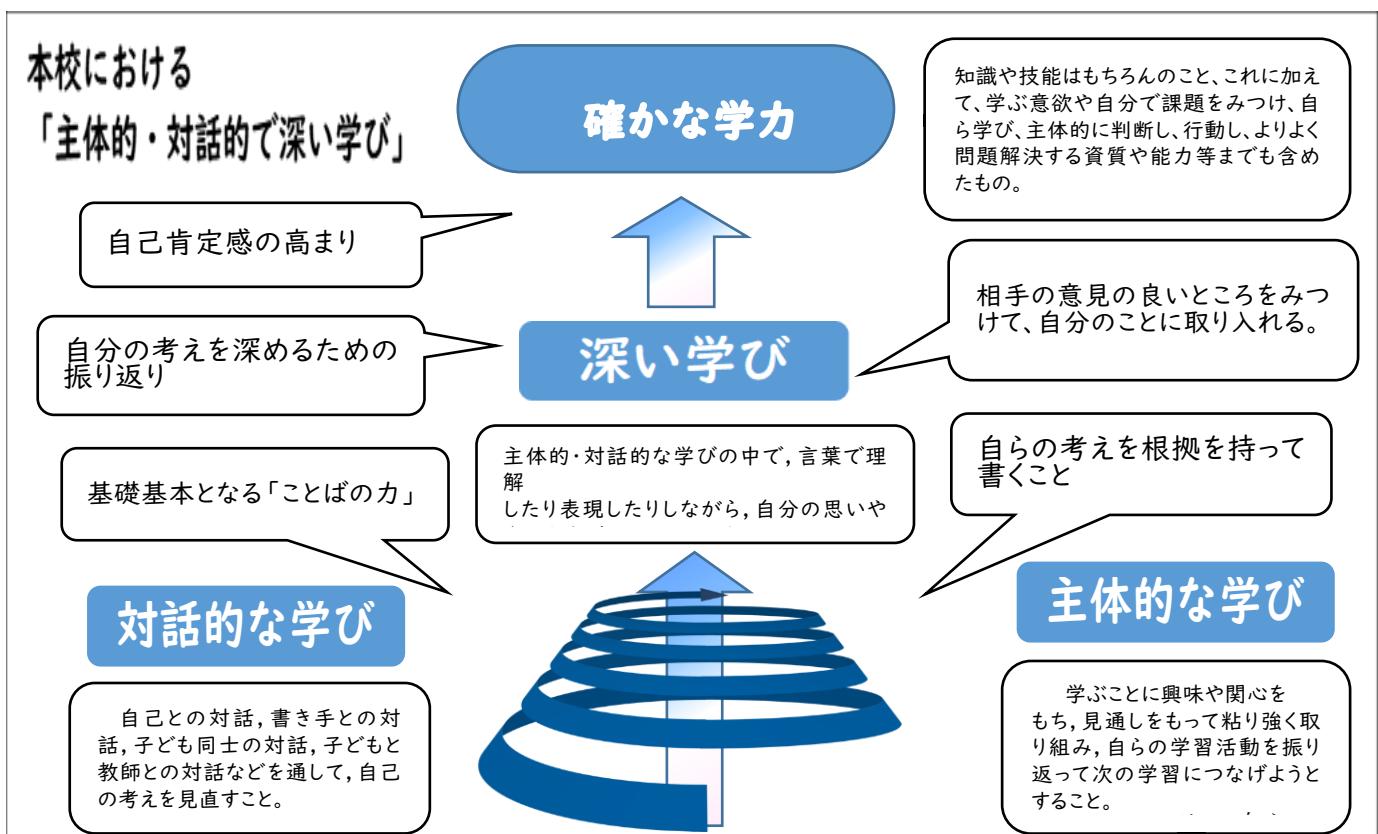
②自らの考えを根拠を持って書くことができるための工夫

- ・本文の中から自分の考えの根拠を見つけるための工夫。
- ・相手意識を持った表現や伝え方の工夫。

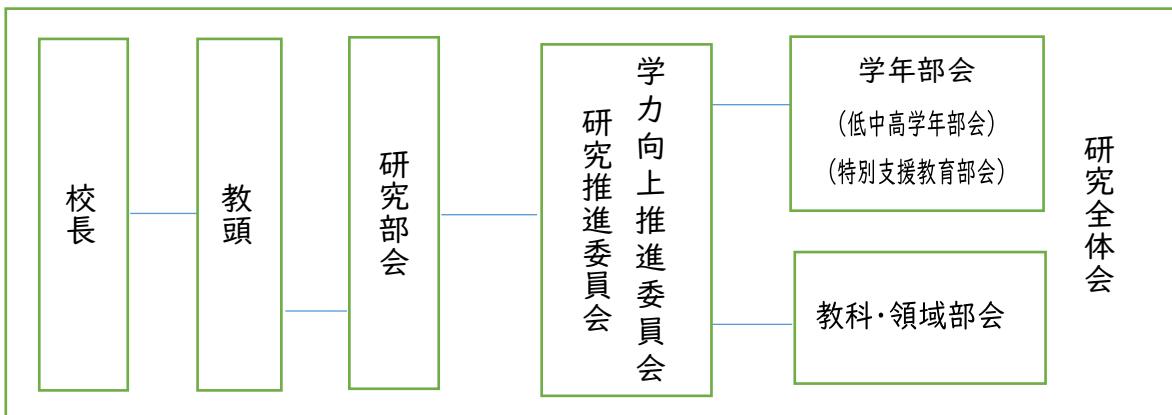
③自分の考えを深めるための振り返りの工夫

- ・児童が本時で「どのような力が身についたのか」「他の児童の良かったところは、どこだろうか」「他の児童の考えを聞いてどう思ったのか」など、明確な目的意識を持った振り返りの取り組み。また、自分の考えがどう深まったのかを表現するための工夫。

○研究の視点にせまるために



4. 研究の組織



組織	メンバー	活動内容
研究推進委員会	学校長 教頭 教務主任 研究部長 各学年代表者	<ul style="list-style-type: none"> 研究主題の設定 研究内容の検討 各部会との連携 研究紀要作成の計画、運営
学力向上推進委員会	学校長 教頭 教務主任 学力向上推進担当 各学年代表者	<ul style="list-style-type: none"> 学力向上の推進計画、運営 モジュール学習の推進 カリキュラムマネジメントの推進 メンター研修の計画、推進
研究全体会	全教職員	<ul style="list-style-type: none"> 研究計画、方針等の協議、共通理解 研究授業と研究討議会 研究の成果と課題についての協議、共通理解
学年部会 (低中高学年部会)	全教職員	<ul style="list-style-type: none"> 学習指導の構想 資料や教具の作成 学習指導案の作成 学年部授研究授業と研究討議会
教科・領域部会	各教科・領域主任	<ul style="list-style-type: none"> 教材や教具の整備と充実

5.研究の計画

	研究内容	その他	
4	○研究推進委員会 「研究組織の編成」・「研究主題・計画の検討」 「研究計画の立案」	特別支援教育研修会 メンター研修①	
5 ・ 6	○研究推進全体会 「研究主題・計画の決定」・「研究推進についての共通理解」・「研究授業・討議会の役割分担」 ○国語科全体研修会① ○研究推進委員会「6年生 指導案検討会」 ○国語科授業実践研修① ○6年生 研究授業「インターネットの議論について考えよう」・討議会・研修会	アセス研修会 学力向上推進委員会 特別支援教育研修会 学力向上効果検証授業 外国語科研修会	
7	○国語科授業実践研修② ○国語科全体研修会②		
8		人権教育講演会	
9	○国語科全体研修会③ ○研究推進委員会「3年生 指導案検討会」 ○国語科全体研修会④ ○3年生 研究授業「サーカスのライオン」・討議会・研修会		
10 ・ 11	○メンター研修②「4年生 指導案検討会」 ○中学年部会授業研究 4年生 「ごんぎつね」 ○研究推進委員会「2年生 指導案検討会」 ○2年生 研究授業「お手紙」・討議会・研修会 ○低学年部会授業研究 1年生「おもい出してかこう」	メンター研修② 学力向上効果検証授業 人権実践交流会 学力向上委員会	
12		メンター研修会③	
1	○国語科授業実践研修③ ○国語科全体研修会⑤	区教員研究発表会 外国語科研修会 メンター研修会④ メンター研修会⑤	
2	○高学年部会授業研究 5年生「和の文化について調べよう」 ○学年部会研究授業 特別支援学級「給食の献立を考えよう」	学力向上効果検証授業	
3	○研究推進全体会 「今年度の課題と成果」・次年度の研究内容についての共通理解」	学力向上推進委員会 人権教育実践報告会	

II. 各学年の取り組み

1. 第1学年.....	7
「おもい出してかこう」	
2. 第2学年.....	15
「お手紙」	
3. 第3学年.....	23
「サーカスのライオン」	
4. 第4学年.....	32
「ごんぎつね」	
5. 第5学年.....	40
「和の文化について調べよう」	
6. 第6学年.....	49
「インターネットの議論について考えよう」	
7. 支援学級.....	57

国語科 学習指導案

第1学年

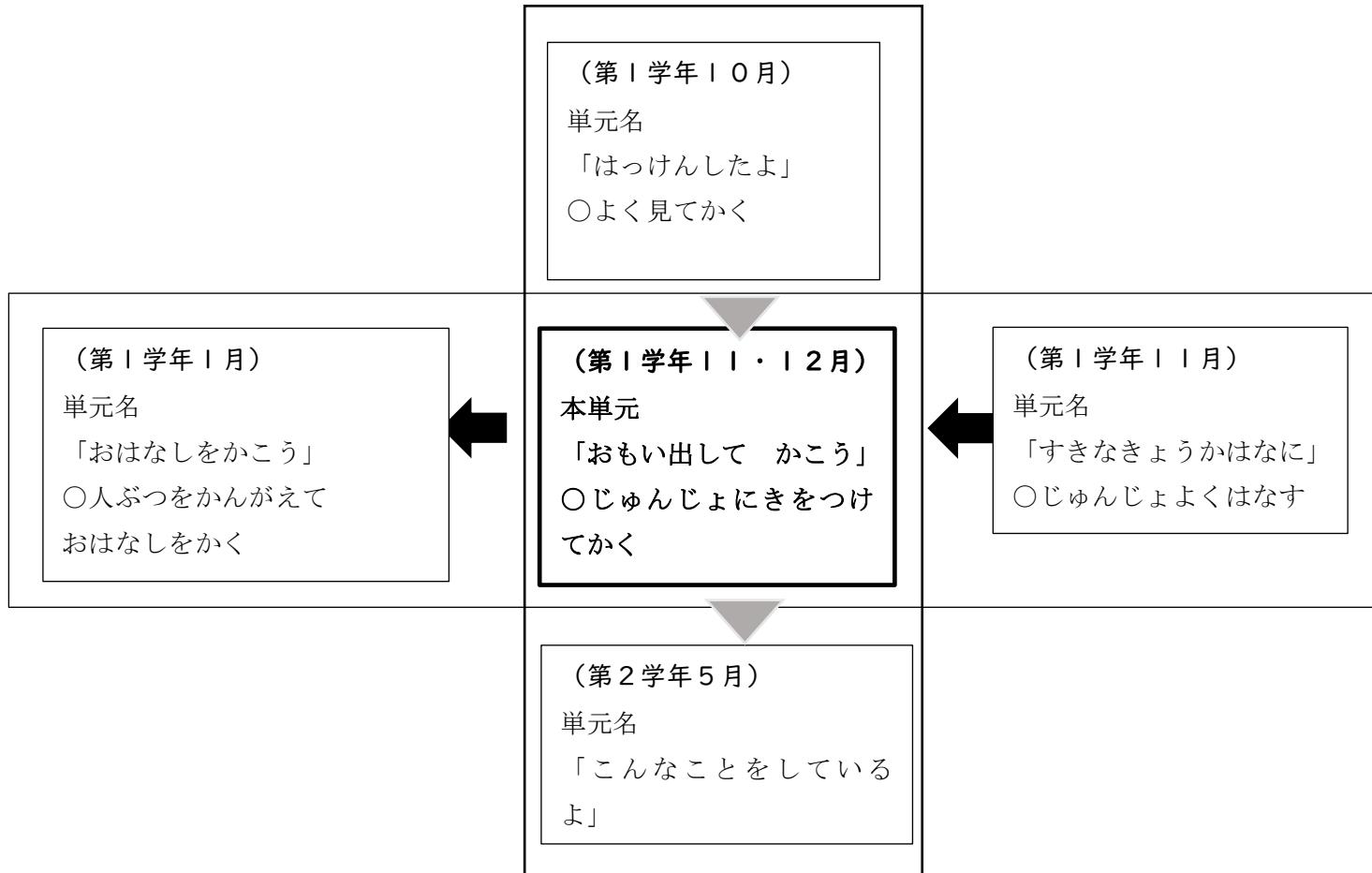
1. 日 時 令和5年11月29日(水) 第5時限(13:50~14:35)

2. 学年・組 第1学年1組 38名 (教室)

3. 単元名 「おもい出して かこう」

教材 (東京書籍 1年)

4. 単元間の関連と系統



5. 学習目標

- 経験した順序に沿って簡単な構成を考え、語と語や文と文との続き方に注意しながら書くことができる。

6. 単元の評価基準

知識・技能	思考・判断・表現		主体的に学習に取り組む態度
	書く能力		
・かぎ(「」)の使い方を理解して文や文章の中で使っている。 …()ウ	◎「書くこと」において、自分の思いや考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えている。 …B ()イ ・「書くこと」において、語と語や文と文との続き方		・これまでの学習や経験で気づいたことやできるようになったことを生かして見通しを持ち、進んで、事柄の順序に沿って簡単な

<ul style="list-style-type: none"> 事柄の順序など情報と情報との関係について理解している。 …（2）ア 	<p>に注意しながら、内容のまとまりが分かるように書き表し方を工夫している。</p> <p>…B（1）ウ</p> <ul style="list-style-type: none"> 「書くこと」において、文章を読み返す習慣を付けるとともに、間違いを正したり、語と語や文と文との繋ぎ方を確かめたりしている。 <p>…B（1）エ</p>	<p>構成を考え、経験したこと報告しようとしている。</p>
--	--	--------------------------------

7. 指導にあたって

（1）児童観

本学級の児童は、平仮名、片仮名を一通り学び、漢字を学習し始めている。「文字を書くことが好きですか。」というアンケートの結果、「はい」と答えた児童は91.7%だった。「いいえ」と答えた児童の理由には、「めんどくさいから」「むずかしいから」というものがあった。鉛筆の持ち方を指導することの必要な児童は学級の約3分の1いる。間違った持ち方が定着しており、正しい持ち方は知っているが、正しく持ったとき書きにくそうにしている。また、罫線を使ってバランスを整えて文字を書くことについて、日々指導している。

文章を書く活動について、体験したことについて文にしたり、物語を読み登場人物の気持ちを想像して書いたりする活動をしている中、「文章を書くことが好きですか。」というアンケートの結果、「はい」と答えた児童は100%だった。少しずつ文章量が増えていることを感じる反面、表現したいことに語彙力が追い付いていないことを児童の文章から感じる。

次に、「自分の思ったことを、友だちにしっかりと伝えられていますか。」というアンケートの結果、「はい」と答えた児童は75%であった。「いいえ」の理由については「いいたいけどなかなかいえない」「つたわりにくい」といったものがあった。伝えたいという気持ちはあるものの、どのように伝えればよいのか難しいと思ったり、伝えたつもりが伝わっていないと感じたりしていることが児童の日常の様子からも伺える。そのため、会話を伴う学習活動をするときは、スムーズに活動できる児童はいるが、意見を言えずに時間切れになってしまう児童もいる。自分で考えた意見に自信を持てなかったり、思っていることをうまく伝えられなかったりすることが課題であると考える。

（2）単元観

本単元における重点指導事項は、学習指導要領におけるB（1）イの「自分の思いや考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること」である。これまでに児童は、経験したことの中から伝えたいことを選び、文章に書く経験をしている。さらに大きなまとまりで段落を分けて文章を書くや、順序を決めてまとまりごとに話すことのよさも学習している。これらの学習を踏まえ、経験した出来事が伝わるように、自分がしたことや思ったことを「はじめに」「それから」「つぎに」などの順序を表す言葉を用い、時間的な順序に沿って文章に書くことをねらいとしている。そして、会話を書くことも取り上げ、かぎ（「」）の使い方についても学習していく。また、生活の中で印象に残っている出来事を、友だちや教師に伝える文章を書く活動が設定されている。児童観で記述した「自分の思ったことを、友だちにしっかりと伝えられていますか。」の「はい」の回答率が他の質問より低かった本学級の児童の感じている課題にもつながり、学校生活の中で学習の成果を生かしやすい。

本単元の言葉の力、「順序に気をつけて書く」は、他教科で調べ学習をした後のまとめの文章を書くときにも活用できるものである。本単元の学習を生かして、したことや見たこと、聞いたことなどを順に思い出し、思ったことを書く際にも学習内容を生かすことで定着を図ることができる。書いた内容について伝え合い交流することで、詳しく書く力をつけていくことのできる単元である。

(3) 指導観

本単元は、「書くこと」の基礎を学習する単元の1つであり、1年生における「説明・報告」の単元の1つとして位置づけられている。これまでの学習事項を踏まえ、単元の活動を通して、時間の順序に沿って書くことのよさをつかませるようにしたい。

第Ⅰ次では、自作のモデル文を使い、内容は児童とイメージを共有しやすい内容にして、活動の意欲を喚起できるようにしたい。次に児童の経験した出来事について発表させ、交流する。先に出来事について書かせ、その時点で想起しにくい児童や、想起できても自信の持てない児童を個別に声をかけるなど支援できるようにしたい。そして、教科書65ページの「言葉の力」を声に出して読ませて順序に気をつけて書くときに必要なことを考えさせ、指導者自作のモデル文を再掲し、なぜ順に書くことがよいのか考えたり、順序が分かる言葉に着目させたりする。それらを踏まえ、学習計画を立てさせる。

第Ⅱ次ではまず教科書63、64ページにある「ゆみさんの文しょう」をもとに、順序よくつながりのある文章を書くために大切なことをおさえさせる。このとき「ゆみさんのしたこと」「ゆみさんの周りの様子」「ゆみさんが思ったこと」を短冊に書き、事柄の種類をつかみやすくし、掲示する。そのうえで、「したこと」について、時間的な順序に沿っていることに気づかせたい。次に、伝えたい出来事を決めて、絵に描かせる。絵を描くことに戸惑っている児童には書きたい出来事を聞くなどし、絵を描くことを支援する。

本時では描いた絵についてお互いに見せながら、内容を詳しく思い出す交流をさせる。そのあと、思い出した内容について、ワークシートに書き出すように指導する。交流の際は、「初めに何をしましたか」「次に何をしましたか」「それから」「さいごは」などの話型を用い、したことや周りの様子、そのときの気持ちについてペアで質問させる。

次時で、ワークシートをもとに、原稿用紙に文章を書かせる。「かぎ」の用法をおさえるとともに、原稿用紙の使い方については本単元でも継続して指導していきたい。書き終えた後、文章を読み返し、清書させる。読み返す際は文字を指で押さえながらゆっくりと声に出して読むように指導する。修正の際は、消しゴムを使わず、赤鉛筆で書き加えるように指導する。

第Ⅲ次では、友だちの出来事の発表を聞いて、よいところを伝え合う活動をさせる。特に「順序に沿って書いているか」、「順序を表す言葉が適切に使われているか」ということを観点にできるように指導する。また、「そのときの気持ち」「周りの様子」について分かりやすく書けているかという点にも着目させ、「よいところ」として見つけられるようにしたい。最後に、時間の順序に沿って文章を書くことのよさについて、学級全体で振り返り、学習のまとめにつなげる。

8. 学習指導計画(全9時間)

次	時	学習活動	○指導・支援 ▲評価
I	1 2	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習課題をつかみ、心に残っている出来事を想起する。 ○ 本単元で身につける「言葉の力」を確かめ、学習の見通しを持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 出来事が思い浮かばないでいる児童には、ほかの児童が挙げた出来事と似た体験やいっしょに体験したことなどを想起するように促す。 ▲ 進んで心に残っている出来事について想起できているか。 ○ 順序よく話すために考えたことや気をつけたことを想起させる。 ○ 順序がわかる言葉に着目させる。 ○ 文章を書くまでの流れをイメージさせる。
II	3 4 5 (本時) 6 7	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教科書の文例をもとに、順序よくつながりのある文章を書くために大切なことを理解する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 教科書のモデル文をもとに、書くために大切なことを考える。 ○ 伝えたい出来事を決めて詳しく思い出し、したことや思ったことを書き出す。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 書きたい出来事を決め、したことや周りの様子などを詳しく思い出してワークシートに書き出す。 ○ 順序に気をつけて文章を書く。 <ul style="list-style-type: none"> ・ ワークシートをもとに、文章を書く。 ○ 書いた文章を読み返し、出来事を順序よく分かりやすく書けているかを確かめる。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 声に出して読み返し、清書 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 順序を表す言葉を使ってることに着目させる。 ○ 見たり聞いたりした周りの人の様子を書くことのよさについて気づかせる。 ▲ 経験した出来事を書く場合には、時間的な順序に沿って書くと伝わりやすくなるということに気づいているか。 ○ 伝えたい出来事を絵に描かせる。 ○ 出来事の様子をワークシートに書かせる。 ○ ワークシートを時間的な順序に並べ替えさせる。 ▲ 伝えたい出来事やその様子について言葉に表し、書くことができているか。 (2) ア ・ B (1) イ ○ ワークシートを読み返し、順序を表す言葉を加え、文章に書かせる。 ▲ 順序よくつながりのある文章をかけているか。 (2) ア ○ 書いた文章を声に出して読み、誤りや付け加えがないか確認させる。 ○ 文章を清書させる。 ▲ 書いた内容について、声に出したり、指で

		<p>する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 原稿用紙の使い方やかぎ（「」）の使い方を確認する。 	<p>文字を押さえたりながら確認することができているか。</p>
III	8 9	<p>○ 友だちの発表を聞いて、伝えたい出来事がよく分かるように書いているところ（よいところ）を見つける。</p>	<p>○ よいところの観点を示し、それを見つけ、伝え合わせる。</p> <p>○ 友だちから感想をもらって感じたことや、友達や先生に伝わるようにどんなことに気をつけて書いたかをノートに書き、発表させる。 B (1) ア</p>

9. 本時の学習（5/9時）

(1) 目標

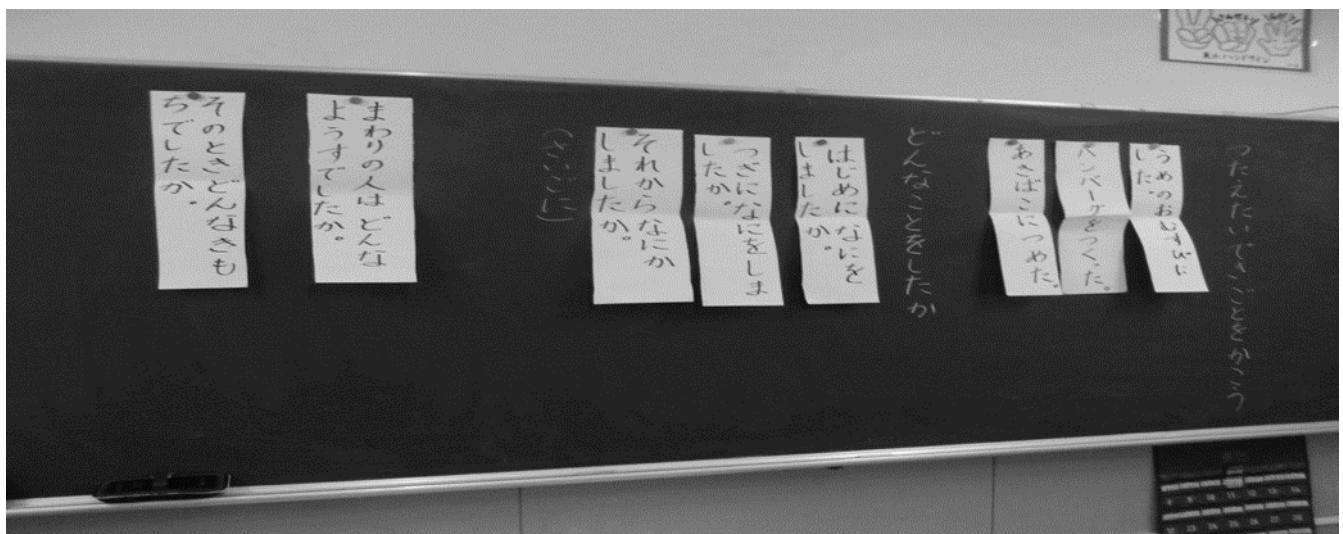
- 自分がしたことや思ったこと、周りの様子などを書き出すことができる。

(2) 展開

学習過程	学習活動	指導上の留意点 (指導者の指導・支援)	学習形態	評価
構造と内容の把握	1. 本時のめあてを確認する。	<ul style="list-style-type: none"> 「ゆみさんの文しよう」を音読し、既習事項の確認をさせる。 前時までに描いた絵を見せ、伝えたい出来事について交流し、書く活動であることをおさえさせる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">(め) つたえたいできごとをかこう。</div>	一斉	
精査・解釈 考え方の形成	2. 絵を見せ、伝えたい出来事について、詳しく思い出す交流をする。 3. 友だちと話したことをもとに、伝えたい出来事をワークシートに書く。 4. 書いたワークシートをペアで確認する。	<ul style="list-style-type: none"> 「初めに何をしましたか」「次に何をしましたか」「それから」「さいごは」などの話型を用い質問させる。 したことや周りの様子、そのときの気持ちについても質問させる。 したことを順に書き出させた後、周りの様子や思ったことを加えさせる。 話したことが伝わっているかを確認できるようにする。 	ペア ペア	
共有	6. 学習の振り返りをする。	交流したことを正確に文にすることができたか振り返る。	一斉	

I0. 板書計画

おもい出してかこう つたえたいできごとをかこう おべんとうをつくったよ	うめの おむすびにした。 あきばこにつめた。 ハンバーグをつくった。	うめの おむすびにした。 あきばこにつめた。 ハンバーグをつくった。	つたえたいできごとについて おもい出すこと ○ そのとき どんなことをしたか。 ・はじめに なにをしましたか。 ・それから なにをしましたか。 ・つぎに なにをしましたか。 ○ まわりの人はどうすでしたか。 ○ そのとき どんな気持ちでしたか。
---	--	--	---



I1. 研究の視点

① 基礎基本となる「ことばの力」を育成するための工夫

- ・ 時間的な順序に沿った文章が書けているか。
- ・ 順序を表すこと伊庭を適切に使っているか。

② 自らの考えを根拠を持って書くことができるための工夫

- ・ 周りの様子やしたことによる気持ちは書けているか。

③ 自分の考えを深めるための工夫

- ・ 友だちの質問に答えたり、その内容を書き出したりすることの良さに気づくことができているか。

I2. 本実践の考察

(1) 基礎基本となる「ことばの力」を育成するための工夫

はじめに、つぎに、それから、など時間的な順序をあらわす言葉については単元を通じて何

度も繰り返し反復をした。また、その順序を入れ変えたらどうなるか考えさせてることで、順序通りに書くことの良さについて児童は気づくことができた。さらに単元終了後も、順序をあらわす言葉を使うことを進んで日記に応用できている児童もいた。

しかし、児童の書いた文章を読んだ結果、はじめに、つぎに、などの後に、どのような内容を書くと伝わりやすい文章になるかの理解については、課題として残った。原稿用紙の使い方についても、誤文の訂正などを繰り返し定着を図ったが、「かぎ」の使い方のルールをはじめ原稿用紙の書き方のルールを守る良さについては“見やすくなる。”という実感を伝えきれず、“そう教えられたからそうする。”の段階に留まった。

(2) 自らの考えを根拠を持って書くことができるための工夫

本時学習で、児童は伝えたい出来事から自分の気持ちに至るまでの過程を説明するのに、時間的順序に気をつけて書いたり、周りの様子を書いたりすることで伝わりやすくすることができると気づくことができた。そのための工夫としてペア学習で内容を伝え合う活動、質問をする活動を行わせることで、伝わり方を確認しあうこともできた。その指導の際、板書の色分けや文字の大きさを工夫するなど、学習活動を視覚的に明確にすることで、児童がねらいにより迫りやすくすることができた。

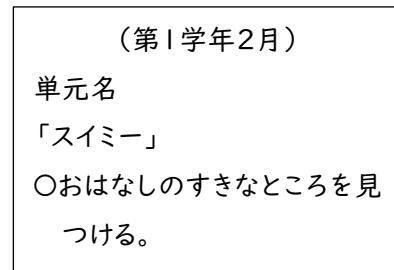
(3) 自分の考えを深めるための工夫

先述したように、伝えたいことについて、書く前にペア学習により口頭で伝えあう学習活動を行った。伝え合う活動をペアにすることで、個々にどのような話になっているか、またどんなところにつまずきがあるのかが指導者が気づきやすくなり、質問の内容やなかなか話しだせないペアなどに細かい支援を行うことができた。児童は、友だちからの質問に対し、考えながら答える場面があり、自分の考えを深めることができた。

I 3. 成果と課題

- 時間的な順序を表わす言葉について反復して練習することで、その後に日記等の文章を書く課題でも意識をして使用している児童が多くいた。
- 伝え合う活動を展開することで、児童は自分の意見に自信を持つことができた。
- 伝えたいことを絵で表することで、伝えたいことの言葉が浮かびにくい児童も内容がイメージしやすく、個別の指導をする際、文章の骨子を崩すことなく行うことができた。
- 単元全体の課題に対する、一時間ごとの学習の目的をより鮮明にすることが必要である。
- 学習の内容をさらに明確にすることで、児童に活動の道筋をより伝わりやすくするために、色分けや大きさ、レイアウトなどをより工夫する必要があった。
- 時間的な順序を表わす言葉について反復して練習することができたが、その言葉を使うことの良さについて児童がどこまで実感できたかを確認する方法については今後考えていく必要がある。

1. 日 時 令和5年11月9日(木) 第5時限(13:50~14:35)
2. 学年・組 第2学年2組 在籍23名
3. 単元名 「読んだ感想を伝え合おう」(「お手紙」東京書籍 2年下)
4. 単元間の関連



前単元(第2学年9月)

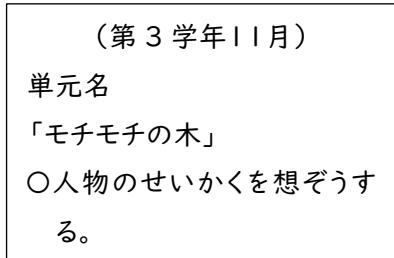
単元名
「ニヤーゴ」
○そうぞうを広げて読む。

本単元(第2学年11月)

単元名
「お手紙」
○自分とくらべ読む。

次単元(第2学年1月)

単元名
「かさこじぞう」
○お話のはじめとおわりをくらべる。



5. 学習目標

- 物語の登場人物と自分とを比較し、物語を読んだ感想を深めることができる。

6. 単元の評価基準

知識・技能	思考・判断・表現		主体的に学習に取り組む態度
	読む能力	書く能力	
・文の中における主語と述語との関係に気づいている。	<ul style="list-style-type: none"> ・場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像している…C(1)エ ◎文章の内容と自分の体験とを結び付けて、感想を持っている。…C(1)オ 	<ul style="list-style-type: none"> ・語と語や文と文との続き方に注意しながら、内容のまとまりが分かるように書き表し方を工夫している。…B(1)ウ 	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでに学習したことを取り返って学習課題を明確にし、学習の見通しを持って、進んで物語の人物の気持ちについて想像を広げ、物語を読んで感想を持とうとしている。

7. 指導にあたって

(1)児童観

本学級の児童は、国語科への学習意欲が高い。学校で行われた授業に関する児童アンケートの「国語の勉強は好きですか?」に対する肯定的回答率では100%になっている。日々の授業でも、「名前を見てちょうだい」や「ニヤーゴ」など物語文の学習を楽しみにしている児童が多くいた。そして主人公の気持ちになって考える際には、想像を膨らませて意見を考えることができている。しかし、友だちとの話し合い活動になると、自分の考えを思いつくまま伝えることはできるが、ノートに気持ちを書く活動になるとどのように表現してよいか困ってしまったり、自分の気持ちを上手く書けなからずする児童も少なくない。

「ニヤーゴ」では、各場面での猫がネズミを食べたい気持ちや、“ニヤーゴ”というセリフに込められた気持ちを想像しながら音読や読み取りを行った。また、2場面と5場面の“ニヤーゴ”というセリフにはどんな違いがあり、猫の気持ちがどのように変化したのかを考えることで、人物の心情の変化についても学習を行った。「ニヤーゴ」の学習でも、気持ちを想像することに困ってしまったり、想像していることを文章で表現することができなかったりする児童がいた。また、想像が肥大しすぎて自分自身の気持ちばかりを書いてしまい、叙述をもとに理由を考えることができない児童もいた。

このようなことから、根拠や理由をつけながら、自分の思いを書く力につけることが今後の課題と考える。

(2)単元観

本単元は、がまくんとかえるくんの二人の関係を描いた物語である。お手紙が欲しいがまくんと、がまくんのためにお手紙を書くかえるくん。二人の微笑ましいやりとりを中心に書かれており、二人の行動や会話に着目することで、二人の様子や気持ちを想像しながら読むことができる。差出人も内容も分かっているお手紙を待つ時間について考えることによって、二人の仲が深まる様子を読み取ることができる教材である。

本単元における重点指導項目は、学習指導要領における【思考力・判断力・表現力等】の「C 読むこと」(1)オ「文章の内容と自分の体験とを結びつけて、感想をもつこと。」である。児童はこれまでに、登場人物の行動を読み取り、人物の様子を思い浮かべて物語を読むことを学習してきている。また、物語を読んで、自分なら、どのような気持ちになるかを考えて感想を持つ学習をしてきている。本単元では、そうした経験を踏まえ、登場人物の行動や会話を読み取り、読み取ったことと、自分の体験とを結び付けながら感想を持つことにつなげる。さらに、物語を読んで内容や感想を伝え合うという言語活動を設定している。同じ物語を読んでも、心に残るところや、感じたり考えたりすることは一人一人異なるだろう。

友達と感想を交流し、様々な感じ方や考えに触れることで、物語を読む際に着目する視点が広がり、自分

の体験との結び付け方が豊かになる。児童にとって、友だちは日々共に生活している相手であり、非常に身近な存在である。友だちも増え、仲も深まってきた2年生にとって、この物語は「自分だったら…」と、お話の世界に入り込んで想像しやすいため、気持ちが書きやすい教材となっている。

(3) 指導観

第Ⅰ次では、自分たちの身近にある「お手紙」がテーマであることから登場人物の二人の気持ちに寄り添い、「自分自身ならどうか」という観点で考えられるように指導する。初発の感想として、物語を読んで印象に残った場面や、好きな場面を選ぶ。そして場面分けでは、「時・場所・人物」をヒントに場面が分かれることを確認し、全文を通読し物語の大体をつかむことができるようとする。

第Ⅱ次では、各場面ごとに、場面での人物の行動や言動、様子などが分かる叙述に着目して「自分ならどう思うか」という自分の経験を踏まえながら、登場人物の二人の気持ちの変化を捉えられるようとする。そして第一場面では、かえるくんにとってお手紙を待っている時間が1番悲しい時間だということを押さえる。第二場面では、がまくんがかえるくんへ手紙を書くやさしさについて読み取り、第三場面では、もう手紙を待つことを諦めてしまったかえるくんを励ましながら手紙を待つがまくんの心情を読み取る。本時の第四場面では、第一場面と同じ場所で「手紙を待つ二人」だが、手紙を待っている気持ちが違うことを挿絵や叙述から読み取ることができるようとする。変化の要因として、手紙が届くことに対する期待の表れが、それぞれのかえるにあることに気付かせたい。1つは、かえるくんからの手紙を幸せな気持ちで待つがまくんの手紙に対する期待。もう1つは、がまくんの喜びを目のあたりにしたことで、かえるくんも嬉しい気持ちになっている手紙に対する期待を読み取れるようにしたい。そのために、二つの場面のヒントになる挿絵と叙述を掲示し比較しながら違いに気づかせるようとする。黒板に挿絵や叙述を掲示することで、想像を肥大させることなく物語から根拠を持たせられるように指導する。全場面での学習で読み取りと共に、がまくんやかえるくんの気持ちを想像したものをノートの吹き出しに書くようとする。ペア活動では、自分の書いた吹き出しについて話し合い、相手の意見を受け止め、自分の考え方との共通点や相違点があることに気づき、様々な考えに触れながら想像を広げさせたい。意見を伝える際には理由や根拠と一緒に伝えるために、教科書に線を引かせるようとする。全場面の学習を終えた際には、物語を読み取って印象に残った場面などの感想を書き全体で交流する。その際は、感想を考える視点の1つとして、初発の感想からどう変わったかを交流の場面で伝えるようにしたい。第Ⅲ次の最後には、がまくんの気持ちになり「かえるくんへのお礼の手紙」を書く。今までの学習から、がまくんがどういった気持ちで手紙を書くのかを想像しながら書けるようにしたい。

第Ⅳ次では、がまくんへ書いた手紙の発表会を行う。様々な手紙の内容に触れ、手紙を書く楽しさや受け取った時の嬉しい気持ちに少しでも触れることで、手紙の大切さに気付けるようにさせたい。また、今後の学習でも、登場人物の気持ちに寄り添い、想像することの楽しさを味わえるように指導をしたい。

8. 学習指導計画(全11時間)

次	時	学習活動	指導・支援 ▲評価
I	1	○ 初発の感想を書き、単元の学習の見通しを立てる。	<ul style="list-style-type: none">教科書を読み、題名や挿絵から想像を膨らませる。「お手紙」を読み、初発の感想を交流しながら、学習課題を確かめる。 <p>▲ 叙述を基に感想を書くことができている。</p>
	2	○ 物語の「時」「場所」「人物」を確かめ、物語の場面分けをする。	<ul style="list-style-type: none">場面分けをすることで物語の大体を捉えさせる。 <p>(1)エ</p>

Ⅱ	3	○ 第一場面を読んで、人物の気持ちを想像して書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・「がまくん」と「かえるくん」が悲しい気持ちになっている理由について押さえる。
	4	○ 第二場面を読んで、人物の気持ちを想像して書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・「かえるくん」が「がまくん」に手紙を書いたときの気持ちや理由について想像を広げさせて、吹き出しに書かせる。 ・「かえるくん」が急いでいた理由について押さえる。
	5	○ 第三場面を読んで、人物の気持ちを想像して書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・お手紙を待つことを諦めている「がまくん」やお手紙を待っている「かえるくん」の気持ちについて想像を広げさせて吹き出しに書かせる。
	6	○ 第四場面を読んで、物語の中で起こった出来事を確かめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・「かえるくん」と「がまくん」が一緒に手紙を待っている理由について押さえる。
	7 本時	○ 第一場面と第四場面を比べ、人物の気持ちを想像して書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・第一場面の2人と第四の2人の挿絵を見て、表情の違いに着目することで気持ちの変化を捉えさせる。 ・会話文などに線を引くことで、根拠を持って2人の気持ちの想像を広げさせる。 <p>▲ 会話文から二人の様子や行動を読み取ることがができる。(1)エ</p> <p>▲ がまくんとかえるくんの気持ちを読み取ることができる(1)オ</p> <p>▲ がまくんやかえるくんの気持ちをノートに書くことができる。B(1)</p>
	8	○ 第五場面を読んで、物語の中で起こった出来事を確かめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・お手紙が届いたときの2人の気持ちについて、想像を広げさせて吹き出しに書かせる。
	9	○ 物語の感想を友達と伝え合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの学習を振り返り、印象に残っているところをノートに書くようとする。 ・ノートに書く際には、「なぜなら~」などの理由も書くように声掛けする。
	10	○ かえるくん宛に手紙を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの学習を踏まえて、「がまくん」の気持ちになり「かえるくん」に向けての手紙を書く。
	11	○ 単元の学習を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ・手紙の発表会を行う。 ・文章に込められた気持ちなど、友だちの発表の良いところを見つけさせる。

9. 本時の学習(7／11時)

(1) 目標

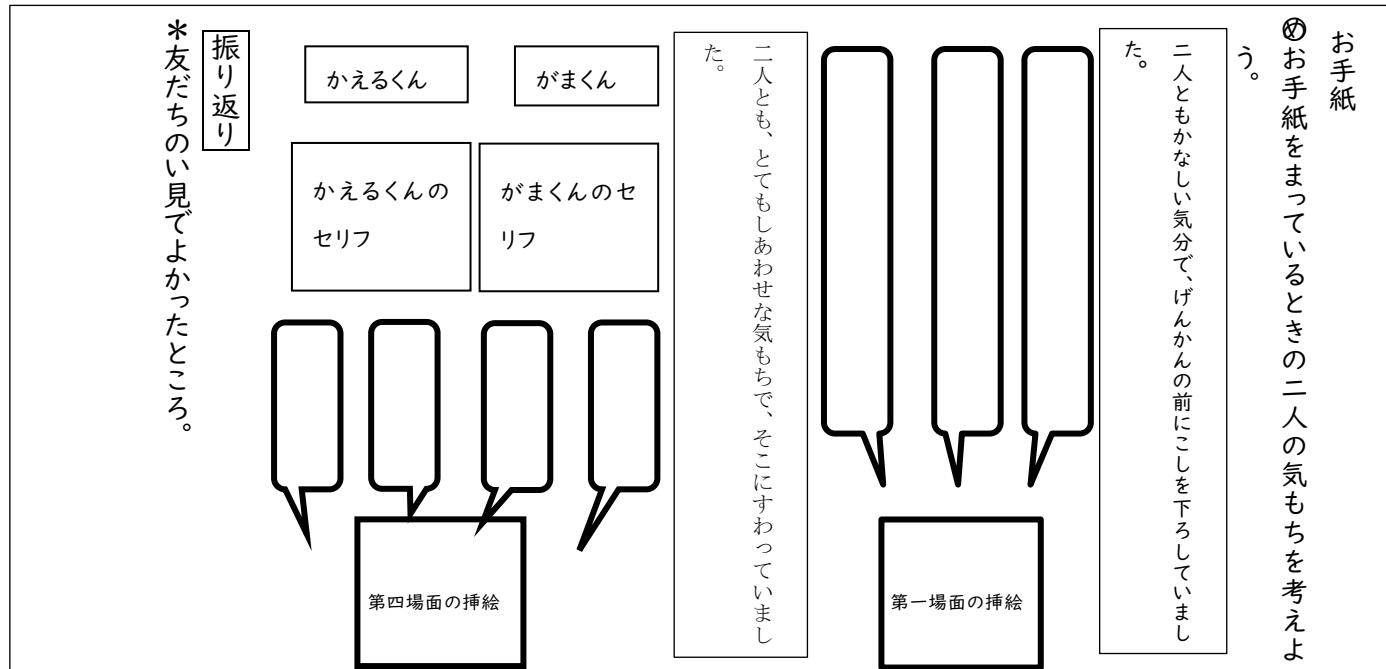
- ・第一場面と第四場面を比べて、二人の様子や気持ちを想像することができる。

(2) 展開

学習過程	学習活動	指導上の留意点 (指導者の指導・支援)	学習形態	評価
構造と内容の把握	1. 本時のめあてを確認する。 ④お手紙をまっているときの二人の気もちを考えよう	・ 前時に学習した、第四場面の振り返りをすることで本時の学習に繋げやすくする。	一斉	
精査・解釈	2. 第四場面を音読する。 3. 第一場面の振り返りをする。 4. 第四場面のがまくんとかえるくんの心情が分かるところを見つける。	・ 二人の気持ちを考えながら音読するように声掛けする。 ・ 第3時で考えた「がまくん」と「かえるくん」の気持ちを提示することで振り返しやすくする。 ・ 二人の気持ちがわかるところに線を引くことで、視覚的にわかりやすくする。 ・ 気持ちがわかる叙述を探す際に、会話文に着目することで考えやすくなる。	一斉 一斉 一斉	・ 会話文から二人の様子や行動を見つけることができる。
考え方の形成	5. 二人の気持ちについて考え想像して書く。 6. ペアで考えを深める。	・ 叙述や挿絵をヒントに、二人の気持ちの変化に着目して、その時の気持ちを考えるように声掛けする。 ・ 二つの場面の叙述や挿絵を比較することで、二人の気持ちの変化を捉えられるようにする。 ・ 意見を伝える際には、「～だと思います。なぜなら～だからです。」などの話型に沿って話し合いが進められるようになる。 ・ お互いの考え方の共通点や相違点を見	個人 ペア	・ がまくんとかえるくんの気持ちを読み取ることができる。

		つけて、考えを深められるようにする。		
共有	7. 全体で発表する。 8. 振り返りをする。	<ul style="list-style-type: none"> 全体で考えを共有し、様々な考えがあることに気付かせる。 友だちの意見を聞いて、よかったですについて書くようにする。 	一齊 個人	

10. 板書計画



11. 研究の視点

①基礎基本となる「ことばの力」を育成するための工夫

- 自分の意見を伝える際に、叙述や挿絵を用いて理由や根拠を伝えることができているか。
- 話し合いの際には、「～だと思います。～なぜなら～だからです。」など、話型に沿った話し合いができているか。

②自らの考えを根拠を持って書くことができるための工夫

- 教科書の会話文などの根拠となる文に線を引くことができているか。

③自分の考えを深めるための工夫

- 振り返りの際に、「友だちの意見でよかったところ」について書くことができていたか。

I 2. 本実践の考察

(1) 基礎基本となる「ことばの力」を育成するための工夫

今回の授業では、単元を通して自分の意見を伝える際には叙述や挿絵を用いて理由や根拠を伝えることができるよう指導を行った。1学期から本学級は意見を伝えることはできるが、理由をつけられなかつたり理由は想像になってしまったりする児童が多くいた。そのため、本単元の初めから理由を考える際に叙述や挿絵を使って理由を考えるように声掛けを行った。考える際の決まり事として、『1. 登場人物の気持ちを考える』『2. 理由となる叙述や挿絵に線を引く』『3. 「なぜなら～だからです」に沿った理由を考える』の順番で活動を固定し、毎回の授業で指導した。児童によって書くスピードに差があるため、早く書けた児童はノートに理由まで記入した。時間内ではノートに気持ちまでしか記入できていない児童は、教科書に引いた線を使って話し合いの際の手立てにした。どの児童も、ノートや教科書を頼りに自信をもって話し合いに参加できており、積極的に意見交流していた。

(2) 自らの考えを根拠を持って書くことができるための工夫

本単元では、“がまがえるくん”と“かえるくん”的登場人物の気持ちを想像する学習内容になっている。登場人物に合わせて、教科書に引く線を色分けすることで視覚的にわかりやすくなった。二人分の気持ちを考えて記入するため、時間にあまり余裕がなかったが、教科書に引いた線をヒントに自分なりの考えをノートにまとめることができた。

(3) 自分の考えを深めるための工夫

本単元から、振り返りシートを活用した。振り返りでは、友だちの意見の良いところや自分と他者の意見を比べて書くように指導した。初めは、「たくさん発表できていた。」「みんなたくさん手を挙げていた。」などの感想となっていた。そこで、全体共有の場面で発表の仕方の決まり事として、「～さんと同じで」「～さんと似ていて」「～さんと違って」などを自分の意見の前に入れて話し合いをつなげる様にした。板書にも、発表者の名前を掲示することで自分と友だちの意見を見比べることができた。毎時間続けていくと、振り返りシートにも「〇〇さんの意見と自分の意見が同じだった。」や「〇〇さんと意見が違ったが、〇〇さんの発表でがまくんの気持ちがわかりやすかった。」などの振り返りのコメントが多数出てきた。

I 3. 成果と課題

- 登場人物の気持ちになり切り、意見の理由や根拠を教科書の叙述や教科書から見つけて話し合うことができた。
- 話し合いや発表の際に、「〇〇さんと同じで～」「〇〇さんと似ていて～」「〇〇さんと違って～」など使って友だちの意見と自分の意見を比べながら、話をつないでいくことができた。
- 振り返りの際に、友だちの良かったところや自分の意見との比較をしながら、分かったことや感想を書くことができた。
- 子どもたちの意見を登場人物の“がまくん”と“かえるくん”と二つで分けたが、板書をセリフの時系列にまとめるほうが会話の繋がりや意見のまとまり方がわかり、理解が深まったように感じた。

国語科 学習指導案

第3学年

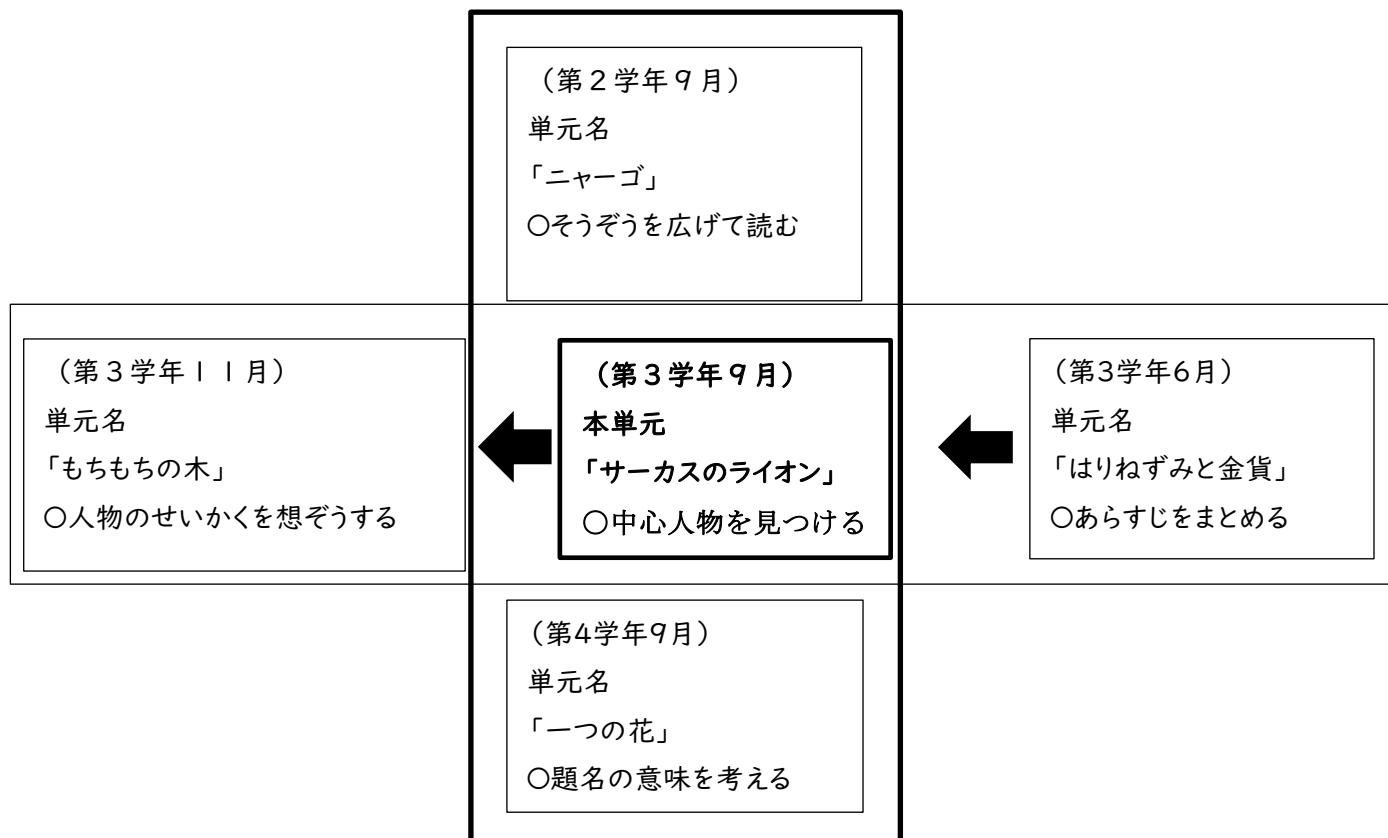
1. 日 時 令和5年9月20日(水) 第5時限(13:50~14:35)

2. 学年・組 3年1組(教室) 21名

3. 単 元 名 「人物につたえたいことをまとめよう」

教材(「サーカスのライオン」東京書籍 3年)

4. 単元間の関連と系統



5. 学習目標

- 登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像し、物語の中心人物について考えることができる。
 - ・ 様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増やすことができる。(知識・技能)
 - ・ 登場人物の行動や気持ちなどについて、叙述を基に捉えることができる。(思考・判断・表現)
 - ・ 登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像することができる。(思考・判断・表現)
 - ・ 相手を意識して、想像したことなどから書くことを選び、伝えたいことを明確にすることができる。(思考・判断・表現)

6. 単元の評価基準

知識・技能	思考・判断・表現		主体的に学習に取り組む態度
	読む能力	書く能力	
・ 様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増すことができる。 …(1)オ	<p>◎ 登場人物の行動や気持ちなどについて、叙述を基に捉えることができる。…C(1)イ</p> <ul style="list-style-type: none"> 登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像することができる。 <p>…C(1)エ</p>	<p>相手を意識して、想像したことなどから書くことを選び、伝えたいことを明確にすることができます。</p> <p>…B(1)ア</p>	<p>これまで学習したことや読書経験を生かして学習課題を明確にし、学習の見通しを持って、進んで、登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像し、中心人物に伝えたいことを文章にまとめて伝え合おうとしている。</p>

7. 指導にあたって

(1)児童観

本学級の児童は、学習意欲が高く、発言・発表をする児童が多い。さらに、学習以外の場面でも、自分の話を聞いてほしいと思っている児童が多い。だが、その伝えたい想いの中で感想や自分の考えをもつことはできるが、感想を書くと「面白かった。」「楽しそうだった。」などと、短い言葉で表現することが多い。しかし、指導者が「どこがおもしろかったの?」「どうして楽しそうだと感じたの?」と問いかけると、叙述から説明することはできている。このように、自分の考えをもつことができても、文章がまとまらず明確に書くことができないために、国語科が苦手だと感じている児童も多い。そのため、他の教科でも児童が自分の学んだことや考えたこと、一日の振り返りなど、書く活動を多く取り入れるようにしている。その活動により、少しずつ文章量が増えたり、「なぜ自分がそう考えたのか」という理由を説明して書くことができたりする児童が増えてきている。話し合い活動では、さまざまな場面でペアやグループでの話し合い活動を取り入れてきたが、自分のことを発表して終わることも多く、なかなか深い話し合い活動には至っていない。そして、友だちとの関わりの中で考え方を深めたり、自分の意見をはっきりと伝えきたりする児童も少ない。そこで、友だちとの関わりの中で自分の考え方を形成する児童を目指したい。また、話し合い活動を繰り返す中で、相手に自分の想いを伝えるための工夫や、自分の意見と比較して聞く力を身につける必要がある。

「読むこと」においては、4月教材「すいせんのラッパ」で、場面の様子を思い浮かべながら物語を読み、音読で表現する学習をした。実際に体を動かして登場人物の心情によりそいながら音読することを楽しむ児童が多くいた。「“豆つぶみたいな”やから声はめっちゃ小さいほうがいいよな?」など、叙述から表現方法を考え音読を発表することができた。

「書くこと」においては、既習の漢字を使えなかったり、正しい文法で文章を書けなかったりする児童がいるので、より細やかな指導が必要である。特に書くのが苦手な児童は、書き出してつまずくことが多い。人物の気持ちを想像して心の声を書く活動や、友だちの意見を聞いて自分がどう思ったのかという振り返りの活動など、何度も繰り返す活動では、授業のパターンを作ったり、話型、文型を用意したりして書き出しのつまずきをなくしていくことが必要と考える。

(2) 単元観

本単元は、中心人物が「じんざ」と明確であり、行動描写や、男の子との会話などを通し、気持ちの変化が捉えやすい物語である。男の子に出会う前のじんざ、出会った後のじんざ、男の子を助けようとするときのじんざの行動や様子を比べることで、場面の移り変わりとともに気持ちの変化を感じやすい。また、物語の山場で火に飛び込むじんざの行動や物語の結末については、児童から多様な感想が出ることが予想される。

中心人物をはっきりと意識して、行動描写や会話文からその気持ちを具体的に想像し、場面の移り変わりによって気持ちの変化を読み取っていくことで、中心人物について考え、互いの意見を聞きながら伝え合うことができる。児童が叙述から登場人物について考えたことを交流する活動を行うことで、多様な考え方や見方があることに気付き、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。そして、その活動を通して、中心人物に心を寄せながら読むのにふさわしい教材といえる。

さらに、本単元の「言葉の力」は、「中心人物をみつける」であり、その身につけた「言葉の力」は物語の解釈を深めるうえで重要であり、今後の学習の基盤となる力である。

(3) 指導観

本単元では、単元のまとめとして中心人物に伝えたいことを文章にまとめる言語活動を設定している。その活動に向けて、第Ⅰ次、第Ⅱ次では中心人物の気持ちを考え、その理由を書く活動を行っていく。

第Ⅰ次では、読み取ったことを基に、一番心が動いたところを初発の感想として書く。各児童がどの場面でどんなことを思ったのか、一人ひとりが書いた感想の短冊を、場面の移りわりがわかりやすいように並べていく。挿絵を使いながら、場面の内容を確認して、感想を交流できるようにすることが目標である。同時に、その場面の感想の理由も書いて発表する。文型を用いることで自分の感想の根拠が叙述や挿絵から考えられるように指導する。感想を児童に発表させ、その感想を聞いてどう思ったのかを他の児童が考えて発表することで、意見の交流ができるようにしていきたい。学習の終わりには、「じんざに伝えたいことを文章にする」という課題を確認したうえで、流れについて見通しを立てる。漢字や意味調べは、家庭学習や毎時間にその都度行う。調べたことを丁寧に書き写すことで、正しい漢字や文法を意識することができるように指導する。

第Ⅱ次では、一から五の学習場面を読み、じんざの気持ちの変化を場面ごとに考え、その根拠となる大事な一文に着目させる。そして、その一文を選んだ理由を書かせることで、じんざの置かれている状況や気持ちの変化を捉える。叙述を基にじんざの気持ちを想像させたり、前の場面と比較させたりして、心情の変化を読みとらせていく。できるだけじんざになりきり、主体的に学習に取り組めるようにしたい。また、毎時間同じ流れを行うことで、書き出しに不安のある児童もだんだんと書くことができると考える。

本時では、第三場面の男の子との交流を通してじんざの気持ちの変化を叙述を基に考えさせる。まず、じんざの行動や様子が書かれている所に線を引かせる。そして、じんざの気持ちがよくわかる一文と、その時のじんざの気持ちをノートに書かせる。書くのが難しい児童には、□で穴抜きした文型を提示し、自分の考えをみんなに伝えられるように指導する。じんざの気持ちについてペアや全体で話し合わせることで、中心人物の心情の変化をさまざまな意見から捉えさせる。最後に、意見を交流したことをふまえて、その場面のじんざの心の声をノートに貼った挿絵に書き込ませる。また、授業の最初と最後に音読を行い、一時間を通して、理解した内容をもとに、じんざの気持ちを深く考えて最後の音読ができるこを目指したい。

第Ⅲ次では、じんざに伝えたいことを決め、自分の思いとその理由のつながりを意識させながら文章を書かせる。そこでは、文章を友だちに伝え合う活動を通して、友だちの考えを認めながら、じんざに対する想像をさらに広げられるようにしたい。さらに児童が作った文章を全体の前で発表することで、学級全体

で振り返り、学習のまとめにつなげる。たくさんの友だちに伝えることで、満足感や達成感を感じられる活動にしたい。また、振り返りでは、友だちの考え方との違いや共通点を意識して学習していくようにしたい。

8. 学習指導計画(全11時間)

次	時	学習活動	○指導・支援 ▲評価
I	1 2	<ul style="list-style-type: none"> ○ 単元の学習の見通しを立てる。 <ul style="list-style-type: none"> ・ あらすじを確認し、中心人物を意識する。 ・ 初発の感想を書く。 ・ 漢字・ことばの学習。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 物語の中心人物について話し合い、学習の見通しを立てさせる。 ○ 插絵を用意して、場面の移り変わりがわかりやすいようにする。 ○ 感想を短冊で掲示することで、印象に残りやすい場面がどこであるのかを視覚的に示すようにする。 ▲ 感想を叙述を基に捉えているか。 C(I)イ ▲ ことばの意味や、表現について調べられているか。(I)オ
II	3 4 5 6 7	<ul style="list-style-type: none"> ○ 場面ごとに、中心人物の様子や気持ち、その変化を読み取り、中心人物がどのような人物かを考える。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 第一場面からサーカスの中で過ごすじんざの様子や気持ちを読み取る。 ・ 第二場面から、男の子と出会ったときのじんざの気持ちを読み取る。 ・ 第三場面から、男の子との交流により変化していくじんざの気持ちを読み取る。 ・ 第四場面から、男の子を火事から救ったじんざの様子や気持ちを読み取る。 ・ 第五場面を読み、じんざに対する人々の気持ちを読み取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 登場人物のことがわかる言葉や文に線を引かせ、じんざや男の子の性格や置かれている状況などについて想像させる。 ○ 根拠となる言葉や文を基にじんざや男の子の人物像について話し合うようにさせる。 ○ じんざの気持ちがよくわかる一文を選び、選んだ理由を考えさせてることで、じんざの気持ちの変化を捉えさせるようにする。 ○ 插絵を各場面でノートにはり、人物の気持ちを考えやすくする。 ○ 文型を用意する。 ▲ ノートや話し合いの様子から、じんざの気持ちの変化を考えているか。 C(I)イ、C(I)エ

	8	<ul style="list-style-type: none"> ・ じんざの変化を物語全体で確認し、じんざの人物像を思い描く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 各場面をノートや壁面掲示から思い出させながら、じんざの気持ちを考えられるようにさせる。
III	9	<ul style="list-style-type: none"> ○ 中心人物じんざに伝えたいことを文章にまとめる。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 物語全体から読み取ったことを基に、じんざの人物像をとらえる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ これまでの学習を基に、物語全体を通して、じんざに伝えたいことの中心や理由を決めさせる。 ○ じんざに伝えたいこと、という視点から書けるように促す。 ○ 自分の想いとその理由がつながっているのか確かめさせる。 ○ これまでの学習の内容を壁面に掲示し、思い返しやすくする。 ▲ 心に残ったじんざの行動やその理由などをノートに書き出し、そう考えた理由を挙げて文章を書くことができているか。B(1)ア
	10	<ul style="list-style-type: none"> ・ じんざについて伝えたいことについて、根拠や理由をもって文章にまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 書いた文章を伝え合わせる。 ○ 自分の文章と比べながら、伝えたいことやその理由を中心に、同じところや違うところ、共感できるところなどを意識しながら読ませる。 ○ 友だちの書いた文章について感想や気付いたところを全体で話し合わせる。 ○ 今回の学習で、どんなことができるようになったのかや友だちの文章の良かったところを振り返らせる。 ○ 友だちの文章をメモさせておくことで、スムーズに振り返りができるようにする。 ○ 話型を用意する。
	11	<ul style="list-style-type: none"> ○ 単元の学習を振り返る。 <ul style="list-style-type: none"> ・ じんざに伝えたいことを、友だちと伝え合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 話型を用意する。

9. 本時の学習(5/11時)

(1) 目標

- ・第三の場面のじんざの気持ちの変化を考えることができる。

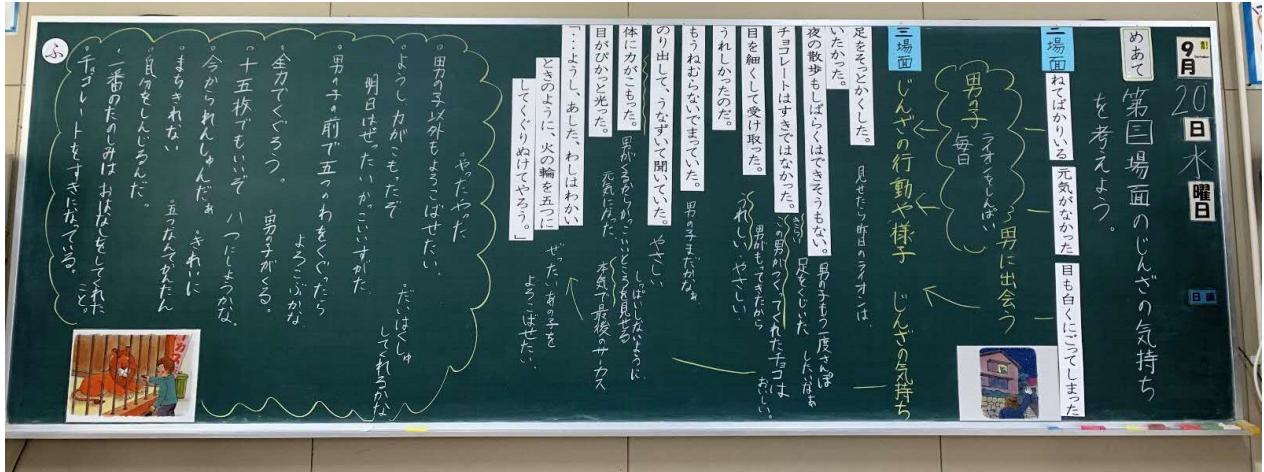
(2) 展開

学習過程	学習活動	指導上の留意点 (指導者の指導・支援)	学習形態	評価
構造と内容の把握	1. 前時の内容を確認する。 ○ じんざの行動や様子を確認する。 ○ じんざの気持ちを考える。 ・ 男の子との出会いでの心情の変化。		一斉	
	2. 本時のめあてを確認する。 ㊅ 第三の場面のじんざの気持ちを考えよう。		一斉	
精査・解釈	3. 第三の場面を音読する。 4. じんざの行動や様子が書かれている所に線を引く。 5. じんざの気持ちがよく分かる一文をノートに書く。 6. 選んだ一文のじんざの気持ちを書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 場面の出来事をおさえる。 ・ 「じんざの」という表現に注目させる。 ・ 丁寧に書きうつさせる。 ・ 第三場面のじんざの気持ちがよく表れている文を選ぶようにさせる。 ・ 「選んだ文は～です。じんざの気持ちは～です。」のように話すときの言葉を考えさせる。 ・ 文型を提示する。 	一斉 個別 個別 個別	<ul style="list-style-type: none"> ・ じんざの行動や様子を読み取ることができる。
考え方の形成	7. じんざの気持ちについて話しあう。 8. 最後のセリフの後に続くじんざの心の声を挿絵のふき出しに書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 黒板に児童が発表したじんざの気持ちを書くことで第三場面の「じんざ」について深く考えることができるようになる。 ・ 第二場面とのじんざの気持ちの変化を感じとることができるように促す。 ・ じんざになりきるようにさせる。 	ペア 全体 個別	<ul style="list-style-type: none"> ・ 男の子との出会いによっておきた二人の心のつながりを読み取ることができる。 ・ 観点を理解してじんざの気持ちを書く

	9. 発表する。	<ul style="list-style-type: none"> 友だちの発表でいいと思ったところは、ふき出しに書き足していくように伝える。 聞き手が、自分の文章との共通点や相違点を意識しながら聞けるよう促す。 読み取ったじんざの気持ちを考えながら音読させる。 	全体	ことができる。
	10. 音読をする。	<ul style="list-style-type: none"> じんざの気持ちの変化でわかったことや、友だちの発表のよかったところを書かせる。 	個別	
	11. 学習の振り返りをする。		個別	

10. 板書計画





II. 研究の視点

① 基礎基本となる「ことばの力」を育成するための工夫

- ・内容に合ったさまざまな音読によって、内容を把握できているか。
- ・文型や話型を用い、自分の考えを書き、発表することができているか。

② 自らの考えを根拠を持って書くことができるための工夫

- ・本文に線を引いたり、囲んだりすることで、その文章から登場人物の気持ちや人物像を想像して書くことができているか。

④ 自分の考えを深めるための工夫

- ・振り返りでは、視点にそって自分の考えが深めることができたか。

III. 本実践の考察

(1) 基礎基本となる「ことばの力」を育成するための工夫

本学習の単元目標は「中心人物を見つける」であり、学習の最後には、中心人物じんざに伝えたいことを文章にまとめることを目標としている。そのためじんざの行動描写や会話文からその気持ちを具体的に想像し、場面の移り変わりによって気持ちの変化を読み取っていくことができるよう、次の二つの手立てを中心取り組んだ。

一つ目は、内容に合ったさまざまな音読を行うことである。単元全体では、全体読み・黙読・指名読み・へび読み（席の順番に「。」まで読む）・一斉読み（自分のペースで独自に読む）等で内容の理解を深めた。様々な読み方を、授業の初めと終わりに毎回行うことで、内容の書き抜き等が取り組みやすくなった。本時では、初めに黙読を行なながら、「じんざ」がしたことや、言ったことに線を引いかせた。その後、へび読みでじんざがしたことや、言ったことがあれば他の児童に手を挙げさせた。線が引いていなかった場合はその時に引かせるようにした。時間を短縮し、みんなでじんざの行動や心情を確認することができた。授業の最後には今日の授業を通して理解したことを考えながら、最後の一文を一斉読みで音読させた。内容理解の違いが音最初と最後の音読に表れたと感じる。

二つ目は、文型や話型を用いることである。ICT機器を活用して文型をパソコンに掲示することで、自分の考えの書き出しに戸惑う児童が少なくなった。全ての場面でじんざの心の声をに吹き出しにしてノートいっぱいに書くことができた。また、毎回使う話型は壁面に常時掲示することで、発表に戸惑うことも少なくなった。文章を読み、内容を把握し、ノートに自分の考えを書き、友だちと意見を交流することで理解を深めることができていた。

(2) 自らの考えを根拠を持って書くことができるための工夫

本文中の全ての「じんざ」を赤で囲み、じんざの行動や心情に線を引いた。毎回黙読を行いその都度、全員で確認することで、慣れることができた。ほぼ全員が自分の力で線を引くことができた。引くことが難しい児童や、引き忘れていた部分がある児童も、ICT 機器を使いデジタル教科書や、板書で全員で確認を行い、自分の教科書を見ることで、じんざの心情の変化を読み取りやすくすることができた。

(3) 自分の考えを深めるための工夫

毎回の授業で振り返りを行うことでパターン化され、また視点を黒板に提示することで、書くことがわかりやすく、書き出して戸惑うことが少なくなった。書くことができた児童から発表を行うことで、書けていない児童の手助けにもなり全員が毎回振り返りを書くことができた。この活動を通して、友だちの様々な感想を聞き、自分とは違う感想から物語のとらえ方を深めることができた。また、児童たちは、自分がよかったと思うことも上手に伝えることができていた。

I 3. 成果と課題

- 文型・話型を使うことや、短冊を文章の順番に並べて児童の意見をまとめることで、板書が視覚的に見やすく、児童の発言や記述の助けとなった。
- 動作化を取り入れ、ジェスチャーを行うことで、場面ごとのじんざの気持ちを理解しやすくなった。
- 授業をパターン化することで、児童が書くことへの抵抗が少なくなり、毎時間じんざの心の声をノートいっぱいに書くことができた。また、振り返りでも視点に沿って、友だちの意見も受け入れながら視野を広げて書く内容が深まっていった。この実践を通して他の授業でも書くことへの抵抗が少なくなった。
- 全員が発表することができていたのはよかったです、たくさんの意見がでていたので、まとめるのに苦労した。短冊を準備していたので、短冊を動かすことで、視覚的に板書をもっとまとめることができたと感じる。
- 発表の中で、じんざの「気持ち」か行動の「理由」かを明確にしていなかったので児童の思考が混ざってしまい、まとめる作業が難しくなってしまった。また、「どこ」でじんざの気持ちが変わったのかから「なぜ」変わったのか児童から発言が出てこないときも、本文に戻り叙述から根拠を抜き出すことを行うべきだった。
- 最後の一斉読みが一文だけだったが、二、三文前から塊で読むことで、本時の理解が深まる感じるので、時間の許す限り多くの音読をこれからも取り入れていきたい。

第4学年

国語科 学習指導案

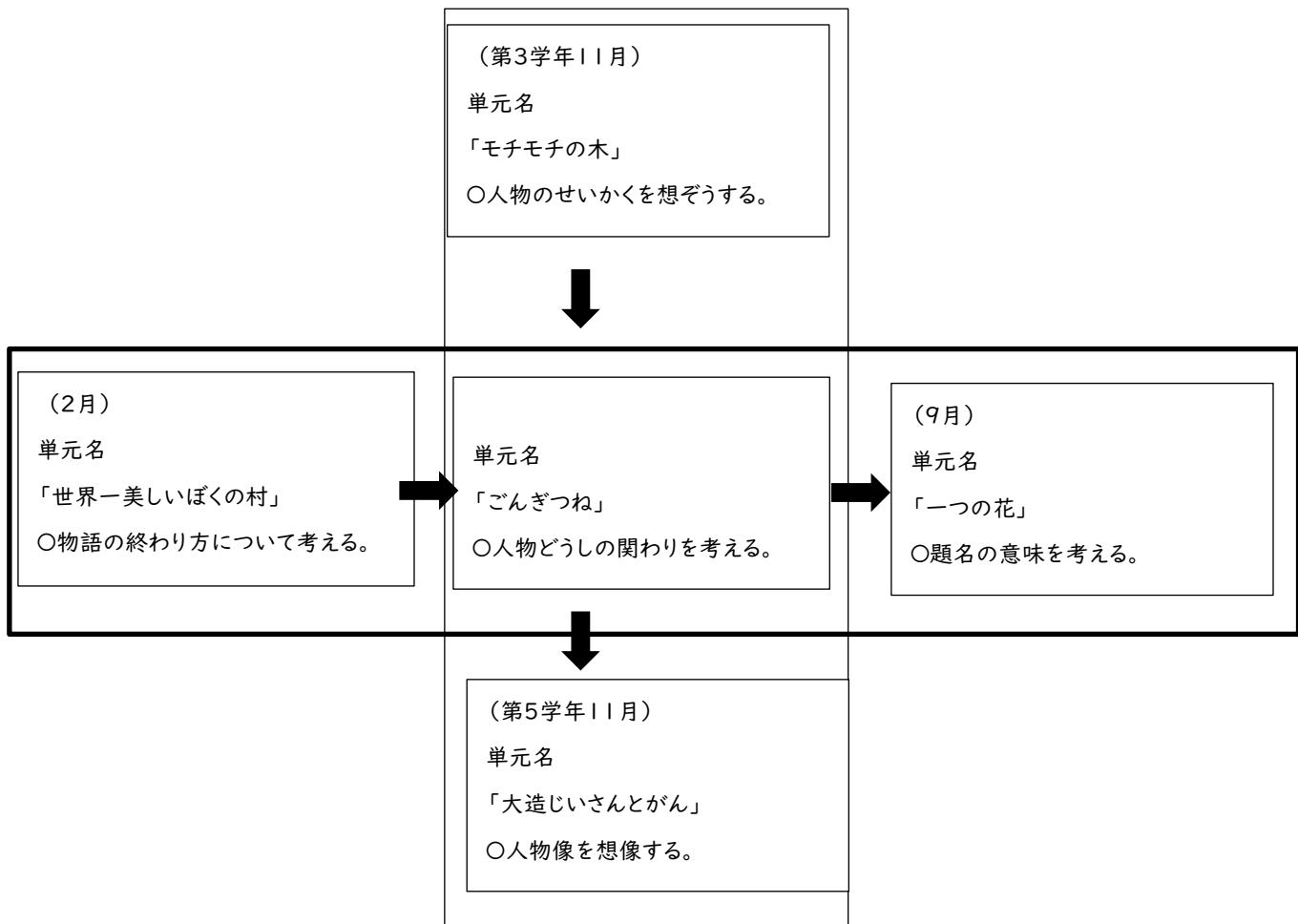
1. 日 時 令和5年10月18日(水) 第6時限(14:45~15:30)

2. 学年・組 4年2組 (教室)

3. 単元名 「読んで考えたことを伝え合おう」

教材(「ごんぎつね」東京書籍 4年)

4. 単元間の関連と系統



5. 学習目標

○ 中心人物とほかの人物との関わりについて考え、感想を伝え合うことができる。

6. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現		主体的に学習に取り組む態度
	読む能力	書く能力	
・ 様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増し、文章の中で使っている。…(1)オ	<ul style="list-style-type: none"> 「読むこと」において、登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移りわりと結び付けて具体的に想像している。…C(1)エ ◎ 「読むこと」において、文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えを持っている。…C(1)オ 	<ul style="list-style-type: none"> 「書くこと」において、自分の考えを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫している。…B(1)ウ 	<ul style="list-style-type: none"> これまでに学習したことや読書経験を振り返って学習課題を明確にし、学習の見通しを持って、粘り強く感想や考えを持ち、伝え合おうとしている。

7. 指導にあたって

(1) 児童観

本学級の児童は、学習に対して真面目な姿勢で取り組み、グループでの話し合い活動にも積極的に意見を言う児童が多い。また、自分の考えを発表するときには、消極的になってしまう児童もいる。そのため、グループでの発表者が毎回同じ児童になってしまることがある。そのようなときには、発表者を輪番制にするようにし、どの児童も発表ができるようにしている。

これまで児童は、中心人物の気持ちの変化を考えながら読むことを学習してきている。「走れ」の学習では、中心人物がのぶよであることや、のぶよの気持ちの変化について考えることができている児童が多くいた。しかし、中心人物の気持ちの変化に気付いているが、どうして気持ちがそのように変化したのかという理由をどのように書いたら良いのかわからず、手が止まってしまう児童もいた。そこで、理由を書くときに手が止まっている児童には、グループやペアで話し合う活動を取り入れ、友だちの考えを参考にできるようにしてきた。また、「一つの花」の学習でも同様な手立てをおこなってきたが、どうしてそのように考えたのか叙述をもとに理由を書くことは、まだ難しい児童が多い。

(2) 単元観

本単元は、「物語を読んで感想や考えを持つ力」を身につける系統に位置付けられる。三年の同系統の単元「モチモチの木」では、物語で描かれる中心人物の姿をどう感じたのかを中心に注目したが、本単元は、中心人物だけでなく、中心人物と深く関わる人物の心情にも目を向けさせる。そのため、さまざまな解釈が可能な結末部分になっている。本教材は、中心人物であるごんと兵十との関係の変容を描いた物語である。ごんの兵十に対する気持ちの変化は、それぞれの場面のごんの行動や心内語などに注目することで読み取ることができる。一方、兵十については、「六」の場面でのごんに対する気持ちの変化を読み取ることが重要であるが、ごんと直接関わる「二」の場面や、ごんの行為だとは知らずにそれについて話している「七」の場面とも関連付けながら考えることができる。物語の結末は、悲劇的でありながら静かな余韻を残し、読者の心を揺さぶる多様な感想を引き出すことのできる教材であるといえる。更に、語り手である「わたし」が村の茂平じいさんから聞いた話であるという、冒頭の設定に立ち返ると、この話を語り継いだ人々の存在を想像することができる。もちろん、その始まりは兵十である。兵十は、どんな思いでごんのことを話したのか、そんなことで思いを巡らせてみることができる教材である。心に響く作品との出会いは、想像力が広がりを見せ読書力

も伸びる時期の児童の、読書に対する意欲をさらに高めるだろう。本教材は情景描写や人物描写に優れ、登場人物の気持ちの変化を叙述をもとに捉えたり、物語の世界を味わったりするのに適した教材であるといえる。

(3) 指導観

本単元では、中心人物とほかの人物との関わりについて考え、感想を伝え合うという言語活動を設定している。

第Ⅰ次では、これまでに読んだ物語文「走れ」や「一つの花」で中心人物のほかに、どのような人物が出てきたのか、中心人物とどのような関係だったのかを振り返らせる。そして、本単元のめあてを全体で確認し、中心人物の気持ちの変化には、ほかの人物との関わりが関係していることを指導していく。また、単元の終末には、感想を伝え合うという活動を行うことを知らせる。次に、全文を通読し、物語の大体の内容を捉えさせる。物語のあらすじを発表させ、中心人物がごんであり、深く関わる人物として兵十が登場することをおさえておく。そして、時、場所、人物など物語の設定を押さえて、場面の構成を確認し、物語の大筋をつかませる。

第Ⅱ次では、それぞれの場面のごんと兵十の気持ちについて考えさせる。特に、「一」の場面で語られている、中心人物であるごんの人物像は、丁寧に押さえておきたい。ごんは、「ひとりぼっちの小ぎつね」であり、分別のつかない子ども（子ぎつね）ではないということや、ごんのしているいたずらが村人たちの生活を脅かすものであり、決して笑って済ませられるようなかわいらしい子どものいたずらでないということも確認しておく。

場面ごとの読み取りでは、出来事や登場人物の行動や気持ちなどを整理させ、ごんと兵十との関わりを軸に物語が展開していくことを意識させる。人物の気持ちが表れている叙述を抜き出して書いたり、叙述から読み取れる気持ちを書いたり、そのとき人物がどう思ったのか（心内語）を具体的に想像して書いたりする。場面ごとにそうした読み取りを行いつつ、前の場面とのつながりも振り返りながら、何がどう変化しているかを考えさせるようにする。また、なぜそういう気持ちになったのかを問いかけるなどして、人物の心情についての理解を深めたい。ごんの気持ちは、「三」の場面で大きく変化している。兵十のおっかあの葬式を見たことをきっかけに、後悔へと変わっていき、兵十を自分と同じ「ひとりぼっちにさせてしまった」という思いが、つぐないを始めるきっかけとなることを押さえておく。また、つぐないの仕方が次第に変わってくるところに、兵十に対する共感や思慕の感情も見えてくるので、きちんと読み取らせていく。ごんの行動や様子などが、つぐないの前と後では、どのように変わっているのかということをペアやグループで対話しながら学習を進めていく。本時では、最後の場面のごんの気持ちについて考えさせる。まずは、くりを持っていく際の兵十に対するごんの気持ちを振り返らせる。そして、兵十の行動や言葉を読み取っていき、撃たれた後の兵十に対するうなづくごんの気持ちを考えさせる。最後のごんの気持ちは直接書かれておらず、想像に委ねられる。どうして、そのような気持ちになっているのか理由も合わせて考えさせることで、より深く読み取っていかせたい。その際に、場面やノートを振り返らせ、今までのごんの気持ちも含めて、撃たれた後の兵十に対するごんの気持ちを考えさせる。その後、グループで意見を交流することで同じように考えてきた児童でも、違った理由で気持ちを捉えていることに気づかせ、深めていきたい。全体交流では、視点ごとに分けさせていくことで、ごんの気持ちの捉え方にも多様な考え方があることに気づかせたい。

第Ⅲ次では、物語の感想を伝え合う活動を行う。一人、ひとりの感じ方や考え方には、違いがあるということに気付かせたい。対話の場面を設けることで、児童自身がさまざまな考えに出会うことの良さを感じることができるように学習を展開していきたい。そのためには、ペアやグループなど、適切な規模での対話の場面を設定するようにする。また、互いの感想を聞いてわかったことや感じたこと、自分の感想と似ているところや違うところをノートや付箋に書かせて言語化させていく。

8. 学習指導計画(全13時間)

次	時	学習活動	○指導・支援 ▲評価
I	1 2	○ 学習課題をつかみ、学習の見通しを立てる。	○ 物語のあらすじをつかみ、心に残った章と理由を考えさせる。 ○ 物語を通読し、場面を分けさせる。 ▲C(I)オ
II	3	○ 第一場面を読み、物語の設定と中心人物の人物像を読み取る。	○ 第一場面を読み、物語の設定を捉えさせる。 ○ ごんがどんなきつねか分かるところについて話し合わせる。 ▲C(I)エ
	4	○ 第二場面を読み、いたずらしたごんと、された兵十の気持ちを読み取る。	○ ごんは、兵十にどんないたずらをしたのか読み取り、そのときの気持ちを考えさせる。 ○ ごんと兵十の関係を考えさせる。 ▲C(I)エ
	5	○ 第三場面を読み、いたずらを後悔しているごんの気持ちを読み取る。	○ ごんが、村で何を見てどんなことを考えたのかを読み取らせる。 ○ 葬式の晩、ごんが考えたことをもとに、兵十に対するごんの気持ちを考えて書かせる。 ○ ごんの気持ちの変化について考えたことを伝え合わせる。 ▲C(I)エ
	6	○ 第四、五、六場面を読み、ごんの兵十への気持ちの変化を読み取る。	○ ごんが兵十に対してどんなことをしたのかを読み取らせる。 ○ ごんの行動の理由を考え、兵十に対するごんの気持ちを想像させる。 ○ ごんの気持ちの変化について考えたことを伝え合わせる。 ▲C(I)エ
	7	○ 第七場面を読み、兵十と加助の話を聞いたごんの気持ちを読み取る。	○ 兵十と加助の後についていくごんの気持ちを考えさせる。 ○ ごんの気持ちを想像し、兵十に対するごんが言いたかったことを考えさせる。 ○ 翌日のごんの行動から、兵十に対するごんの気持ちを想像して伝え合わせる。

	8 本時	<ul style="list-style-type: none"> ○ 第八場面を読み、兵十に対するごんの気持ちを読み取る。 	<p>▲C(1)エ</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 場面冒頭の兵十に対するごんの気持ちを確かめさせる。 ○ 兵十に対するうなずいたごんの気持ちと理由について考え、話し合わせる。
	9	<ul style="list-style-type: none"> ○ 物語を読んで感じたことを文章にまとめる。 	<p>▲C(1)エ</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 物語を通しての、兵十に対するごんの気持ちの変化を確かめさせる。
	10	<ul style="list-style-type: none"> ○ 物語を読んだ感想を伝え合う。 	<p>▲B(1)ウ</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 書いた文章を読み合わせる。 ○ 書いた文章を基に、物語を読んだ感想を伝え合わせる。
	11	<ul style="list-style-type: none"> ○ 他の物語を読み、感想を書く。 	<p>▲B(1)ウ</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 「ごんぎつね」の作者が書いた物語を用意し、物語の感想を書かせる。
III	13	<ul style="list-style-type: none"> ○ 単元の学習を振り返る。 	<p>▲B(1)ウ</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 友だちの感想と比べて気づいたことについて、話し合わせる。 ○ 学習を通して、自分がどのように感じたり考えたりしたのかを書かせる。

9. 本時の学習(8/13時)

(3) 目標

- ・第八場面を読み、兵十に対するごんの気持ちと理由を考えることができる。

(4) 展開

学習過程	学習活動	指導上の留意点 (指導者の指導・支援)	学習形態	評価
構造と内容の把握	1. 前時の学習を振り返る。 2. 本時のめあてを確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・くりを持っていくごんの気持ちを確かめさせる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> ④最後の場面の兵十に対するごんの気持ちと理由を考えよう。 </div>	一斉 一斉	
精査・解釈	3. 第八場面を音読する。 4. ごんの行動や様子が書かれているところに線を引く。 5. 兵十に対するうなずいたごんの気持ちと理由について考え、ノートに書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・場面の出来事を確認させる。 ・撃たれるまでの行動や様子から出来事をおさえる。 ・兵十の気持ちの変化をおさえたうえで、兵十に対するごんの気持ちを考えられるようにする。 	一斉 個別	・第八場面のごんの気持ちと理由を考えることができる。
考え方の形成	6. グループで話し合う。 7. 全体で発表する。 8. 学習の振り返りをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・聞き手が、同じ気持ちでも自分との理由の共通点や相違点を意識しながら聞けるように促す。 ・同じ気持ちや理由になっているのか、違っているのかを考えさせながら交流できるようにする。 ・友だちの考え方との違いや、共感できる考え方、この時間でわかったことについて書かせる。 	グループ 全体 一斉	

⑥最後の場面の兵十に対するごんの気持ちと理由を考えよう。

10. 板書計画

今日もくりを持っていくぞ。こうやつていたら兵十がいつか気づいてくれるかもしない。早く気づいてほしいな。

「おや」と、兵十はびっくりして、ごんに目を落としました。

「ごん、おまえだったのか。いつも、くりをくれたのは。」

「ごんは、ぐつたりと目をつぶつたまま、うなずきました。

「おや。」と、兵十はびっくりして、ごんに目を落としました。

「ごん、おまえだったのか。いつも、くりをくれたのは。」

「ごんは、ぐつたりと目をつぶつたまま、うなずきました。

兵十の気持ち

ごんの気持ちの変化

③友だちの考へで同じところや違いは、あつたのか。
それらを聞いてどのように思つたのかを書く。

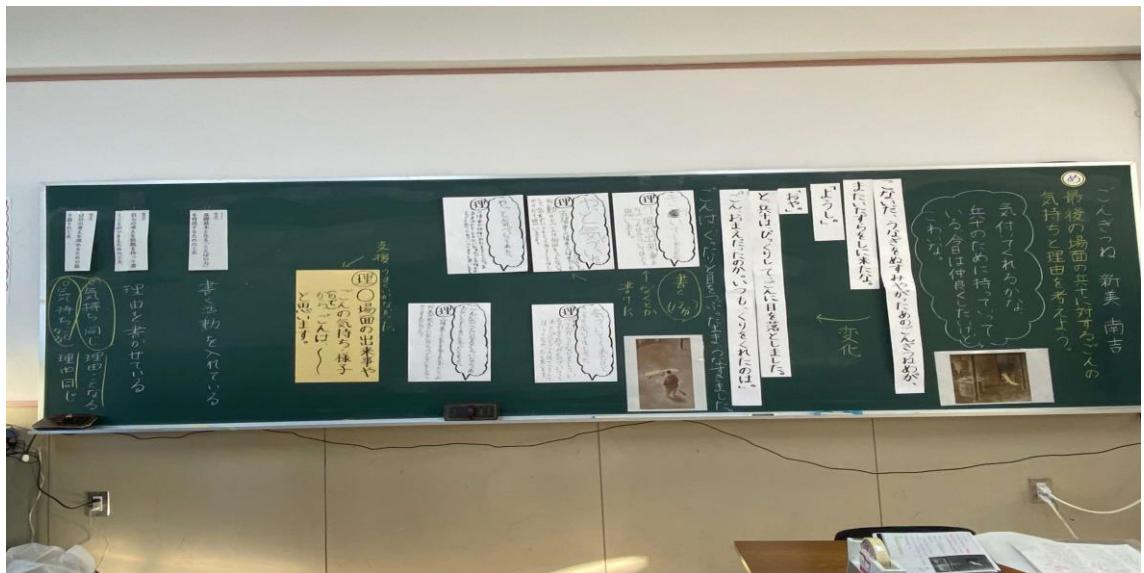
やつと気付いてもらえた。最後に気づいてもらえたから嬉しい。

理由 ごんは、くりや松たけを持つていていたのを神様だと思われて、引き合わないと思っていたけど、それでも今までずっと償いをしてきたので、最後に兵十に気付いてもらえたから嬉しいと思います。

やつと気付いてもらえた。最後に気づいてもらえたから嬉しい。

償いが足りなかつたのかな。撃たれる前に気づいてほしかつたな。

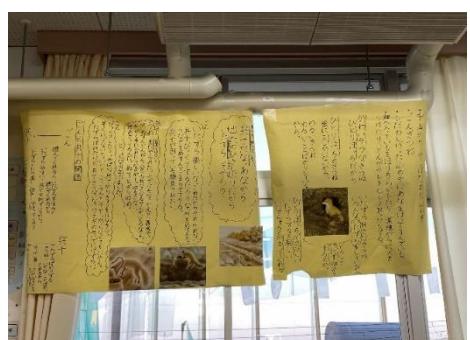
理由 ごんは、今までずっとおつかあが死んでしまつたことを自分のせいだと思って後悔していたから償いを続けていたのに、最後に兵十に撃たれて悲しかつたと思います。



11. 本実践の考察

(1) 基礎基本となる「ことばの力」を育成するための工夫

撃たれた後のうなづくごんの気持ちと理由を考えさせてから、グループ交流を行った。考えるのに時間が必要な児童が多いため長めに時間を取り、それでも間に合わない児童には、口頭で付け足すようにすると交流はスムーズに行えた。グループ交流では、話し合いのポイ



ントとなる文型を準備していたので、「〇〇さんと同じ気持ちで～だと思います。理由は、～からです」と自分の考えたことを相手に伝えることができていた。しかし、考えたごんの気持ちは、同じであっても理由が違っているところまでの交流や、気持ちは違っていても理由が同じであるなどの交流ができていなかった。

(2) 自らの考えを根拠を持って書くことができるための工夫

登場人物の行動や様子には、毎時間線を引いてきたので、第八場面でもごんの行動や様子に線を引くことができていた。また、第八場面では、ごんの行動や様子が表れているところが少ないので、今までの場面から撃たれてうなずくごんの気持ちを考えさせた。何場面のどのような様子から撃たれてうなずくごんはこんな気持ちになっていると思うのか考えることで根拠を持って気持ちを考えることができていた。なかなか見つけられない児童には、ノートや掲示物を確認できるように声掛けした。

(3) 自分の考えを深めるための工夫

本単元では、毎時間振り返りを書くようにしていたので、しっかりと書くことができる児童が多くいた。振り返りには、「ごんが〇〇な気持ちになっていることがわかった。」というようにわかったことを書いている児童がいた。また、「〇〇さんの考えのごんが〇〇な気持ちとは、思わなかった。」「〇場面からは、そんな気持ちだと想像できなかった。」などの児童同士が自分の考えと比較して書いている児童も多く、振り返りを書くことで、より深い学びにつなげることができたと感じた。

12. 成果と課題

○児童の考えを画用紙に書かせて、全体交流の際、板書に貼って動かせるようにしておいたので、グループごとに分けることができた。

○場面ごとにごんの行動や様子、気持ち、変化等を模造紙に書いて掲示しておいたので、児童が場面の振り返りをスムーズに行うことができた。

○書く時間を多くとったので、児童が場面を振り返りながら自分の考えをしっかりと書くことができた。

●全部の場面からごんの気持ちの理由を書かせたので、書き出せない児童がいた。

●ごんの気持ちの違いは、交流することができたが、理由の違いは交流できていなかった。

●ごんの気持ちと理由をノートと画用紙二つに書かせたので、時間が間に合わない児童がいた。

国語科 学習指導案

第5学年

1. 日 時 令和5年10月24日(火) 第2時間(9:55~10:40)
2. 学年・組 5年2組(教室) 27名
3. 単元名 和の文化について調べよう
(「和の文化を受けつぐ—和菓子をさぐる」東京書籍 5年)
4. 単元間の関連と系統

前単元(第4学年5月)

単元名
みんなで新聞を作ろう
「みんなで新聞を作ろう」
○知らせたいことを新聞で伝える。

(第4学年10月)

単元名
くらしの中の「和」と「洋」について調べよう
「くらしの中の和と洋」
○調べたことを関係付ける。

本単元(第5学年11)

単元名
和の文化について調べよう
「和の文化を受けつぐ—和菓子をさぐる」

○必要な情報を見つける。

○資料を使って説明する。

次単元(第6学年6月)

単元名
防災ポスターを作ろう
「防災ポスターを作ろう」
○表現の効果を考えて報告する。

(第6学年10)

単元名
町の未来を考えがこう
「町の幸福論」
○情報を関係付けて活用する。

5. 学習目標

- 文章と資料を結び付けるなどして必要な情報を見付け、論の進め方について考えることができる。
- 目的に応じて資料を活用し、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫して書くことができる。

6. 単元の評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
・ 情報と情報との関連付けの仕方を理解している。((2)イ)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「書くこと」において、筋道の通った文章となるように、文章全体の構成や展開を考えている。(B(1)イ) ・ 「書くこと」において、引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。(B(1)エ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ これまでに学習したこと振り返って学習課題を明確にし、学習の見通しを持って、積極的に必要な情報を見付けたり論の進め方について考えたりし、書き表し方を工夫して、調べたことを報告しようとしている。

	<ul style="list-style-type: none"> 「読むこと」において、目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けたり、論の進め方について考えたりしている。(C(1)ウ) 「読むこと」において、文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げている。(C(1)カ) 	
--	--	--

7. 指導にあたって

(1) 児童観

本学級の児童の国語科における特徴としては、学力の個人差が大きいことが挙げられる。特にⅠ学期に行われた令和5年度「すくすくウォッチ」における国語科では、大阪府平均の正答率20問中14.4問を超える児童が26人中15人在籍していた。しかし、学級の平均正答率は大阪府平均を下回る結果であった。正答率10問以下の児童が多数在籍していることが原因の1つとして考えられ、数値的に学力差を表す結果となっていた。さらに、普段の授業やテストからも学力差が顕著に見られることが多い。

「読むこと」では、5月単元「動物たちが教えてくれる海の中のくらし」で、文章構成図にまとめながら、筆者の伝えたいことがどの部分に強く表れているかを考え、要旨を捉える学習を行っている。その際、文章を読んで理解したことを書く活動を行ったが、書く内容には個人差が見られた。また、本文に書かれている言葉の意味を分からずに流れで文章を読み、意味を理解する児童も多く見られた。そのため、言葉が持つ本来の意味を理解した言語活動につながっていない時も少なくはない。

「話すこと・聞くこと」に関しては、様々な教科でペア、チームで話し合い活動を行っている。その際、リーダーシップをとれる児童がいるペアやチームは活発に話し合い活動ができている。また、発表も役割分担を行ううまくすることができる。しかし、意見を話すことの恥ずかしさや自分の考えに対する自信のなさから、活発に話し合いができるていないペアやチームも見られる。そのため、話型を活用したり、話し合いがやりやすくなるように場を和ましたりしている。

「書くこと」に関しては、6月単元「環境問題を報告しよう」でICT機器を使って必要な情報を読み取り、読み取ったことを活用してチームで環境新聞を作る活動を行った。その際、たくさんの資料から、必要な情報を引用したり、図表やグラフなどを用いたりして情報を集めることのできる児童が多くかった。しかし、それらを的確に用いて説得力のある文章を書く力は十分ではない。また、数名の児童は誤字脱字が多く、短文で終わることが多い。

(2) 単元観

本教材は、伝統的な文化に関するものの中でも児童が想起しやすい和菓子を題材としており、序論・本論・結論の構成が明確な文章である。また、和菓子を「歴史」「ほかの文化との関わり」「支える人々」の三つの観点から説明するという構成は、その後の調べ学習や調べたことを報告する活動へつなげやすい教材である。さらに、説明にあわせて、写真や図表などの資料が用いられており、報告の文章をパンフレットにまとめる際の資料の活用へも、つなげることができる。

また、ICT 機器を活用した学級での発表は、目的を意識して複数の資料や本を読み、伝えたい内容や目的に合わせて必要な情報を見つけることをねらいとしている。また、発表会を行うことを通して、目的に応じて集めた情報を関係付けて文章にまとめることもねらいとし、資料を生かして文章を書くことに適した単元である。

(3) 指導観

第Ⅰ次では、本単元の題名が「和の文化について調べよう」であり、単元の最後には自分たちで調べた「和の文化」について ICT 機器のスライド機能を活用して発表会を行うことを知らせる。その後、児童が単元のめあてをはっきり持ち、学習意欲を高めるために本単元でつけたい学習の力を伝える。言葉の意味調べでは、語彙力とグループのコミュニケーションの向上のためグループで協力して活動をさせる。

第Ⅱ次では、これまでに学習した「動物たちが教えてくれる海の中のくらし」で、本文が序論・本論・結論の三部で構成されていたことを振り返り、本文が三部構成であることを確認する。次に、本論が「和菓子の歴史」「ほかの文化との関わり」「支える人々」の三つの観点に分けて説明が書かれていることに気付かせる。その後、それぞれの説明の観点を整理しながら、資料の効果について読み取らせていく。「和菓子の歴史」では、本文の説明と年表が読み手の理解を手助けしていることに気付かせ、具体的にどのような効果があるかグループで話し合い活動をさせる。話し合い活動では、これまでに学習した「問題を解決するために話し合おう」で学習したことを振り返り、グループの中で司会を決めて話し合わせる。司会の話す言葉は定型文を用意しておき、それを見ながら進めさせる。自分で考えた資料の効果を付箋に書き込み、発表しながらグループの友だちに見せるようにさせる。さらに、付箋を大きな紙に集めることで、グループでの考えを話し合わせる材料とさせる。本時で行う「ほかの文化との関わり」や次時で行う「支える人々」でも説明の観点を整理した後、写真がもたらす効果についてグループで話し合い活動を行う。資料があることで、筆者の説明をより詳しく理解するための手助けになることや、色や形、様子を捉えるうえで効果的であることに気付かせたい。第Ⅲ次では、「和の文化」について発表会をするための準備を行う。紹介したい「和の文化」のテーマや題材は、グループで話し合い決めさせる。発表の内容は、本文と同じように本論を複数の観点で捉えてまとめていく。その際、筆者の三つの観点を手掛かりに自分たちのグループではどんな観点の構成にするのかインターネットで情報を集め話し合わせる。観点の構成を決めることが難しいグループは指導者と相談しながら決めていく。その後、説明の文章作りを行う。序論、本論、結論の書き方を教科書 P154「熊野筆を支える人々」を参考にグループで協力して書かせていく。その中で、序論、結論をグループで、本論の観点を個人で書かせる。本論の観点はインターネットを活用して見つけた文章を引用したり、調べた情報を自分なりの言葉で書いたりするなど児童それぞれの方法で書くことが予想される。そのため、教科書の本文から筆者がどのように、観点を書いているのかよく読ませる必要がある。また、接続語にも注目させ、後で友だちの文章と合わせたときにつながりのある文にさせる。さらに、段落の間違いや誤字脱字がないようグループで添削することや教師の指導により正しい文章構成を身につけさせる。活動を通して、複数の情報を意識して読み、伝えたい内容や目的に合わせて必要な情報を見つけることをねらいとしている。また、この活動を通して目的に応じて集めた情報を関連付けて文章にまとめる力を身につけさせたい。資料はインターネットを使って文章にあった写真や表などを探させ、ICT 機器のスライド機能にまとめさせる。

第Ⅳ次では、調べた「和の文化」について発表会を行う。写真や図は、想像を手助けするようなものが選ばれているか、だれでも分かるような言葉でかかれているかを互いに見せ合わせる。その後、学習を通して振り返りの文章を書かせる。そうすることで、学んだことをどのように生かしたかや、逆に難しかった点などを具体的に書かせることで、深い学びへの足がかりとさせたい。

8. 学習計画(全13時間)

次	時	学習活動	○指導・支援▲評価
I	1	○ 単元の見通しを立てる。	<ul style="list-style-type: none"> 題名と扉絵から内容を想像させ、「和の文化」について意欲的に学習に取り組ませるようにする。 「和の文化」について調べ、調べたことをグループでICT機器のスライドを使って「和の文化」について調べて発表するという単元の目的を持たせる。
	2	○ 言葉の意味調べをする。	<ul style="list-style-type: none"> 国語辞典を使い、グループで言葉の意味調べをさせる。
II	3	○ 本文を読み、文章の構成と筆者の説明の観点を捉える。	<ul style="list-style-type: none"> 本文に段落番号をつけ、序論・本論・結論の三部構成確認させる。 本論の中に、三つの観点「和菓子の歴史」「ほかの文化との関わり」「支える人々」を確認させる。 結論から筆者の「和の文化」に対する考え方読み取らせる。 三つの観点の構成の効果について考えさせる。 <p>▲(2)イ</p>
	4	○ 本論1から書かれている内容と関係付けて、筆者が用いている年表の効果について考える。	<ul style="list-style-type: none"> 「和菓子の歴史」という観点から必要な情報を抜き出させる。 「一つ目は」「二つ目は」「三つ目は」という言葉(接続語)に着目させ、本文を確認させる。 説明の文章と資料がどのように関連づいているかを考える際の手がかりとさせる。 資料の効果についてグループで考えさせる。 考えたことを発表させる <p>▲C(1)ウ B(1)イ</p>
	5	○ 本論2から書かれている内容と関係付けて、筆者が用いている写真の効果について考える。	<ul style="list-style-type: none"> 「ほかの文化との関わり」という観点から必要な情報を抜き出させる。 「次に」「例えば」「また」という言葉(接続詞)に着目させ、本文を確認させる。 説明の文章と資料がどのように関連づいているかを考える際の手がかりとさせる。 資料の効果についてグループで考えさせる。 考えたことを発表し、全体で共有させる

	6	○ 本論3から書かれている内容と関係付けて、筆者が用いている写真の効果について考える。	<p>▲C(1)ウ B(1)イ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「支える人々」という観点から必要な情報を抜き出させる。 ・ 「まず」「また」「一方」という言葉(接続詞)に着目させ、本文について確認させる。 ・ 説明の文章と資料がどのように関連づいているかを考える際の手がかりとさせる。 ・ 資料の効果についてグループで考えさせる。 ・ 考えたことを発表し、全体で共有させる <p>▲C(1)ウ B(1)イ</p>
III	7	○ 「和の文化」について発表会をするための準備を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・ グループで発表する「和の文化」を決めさせる。 ・ 筆者の三つの観点を手掛かりに自分たちのグループではどんな観点の構成で発表するのか話し合わせる。 ・ 役割分担をする。 ・ 資料はICT機器のスライド機能を使ってまとめさせる。 <p>▲B(1)エ</p>
	8	○ 説明に必要な文章と資料を作成する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 決めた観点に沿って情報を集めさせる。 ・ 説明に必要な文章をワークシートに書かせる。 ・ 写真や図をインターネットから探し資料としてスライドにまとめさせる。 <p>▲B(1)エ</p>
	9		
	10		
	11	○ 発表を練習する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ グループで協力して練習させる。
IV	12	○ 「和の文化」についての発表を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 発表を互いに評価させる。 ・ 発表をしあい、良かったところ・工夫しているところを交流させる。
	13	○ 単元を通して学んだことを確かめ、振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前時の発表を振り返る。 ・ 単元で学習したことを確認する。 ・ 振り返りの文章を書かせる。

9. 本時の学習(5/13)

(1) 目標

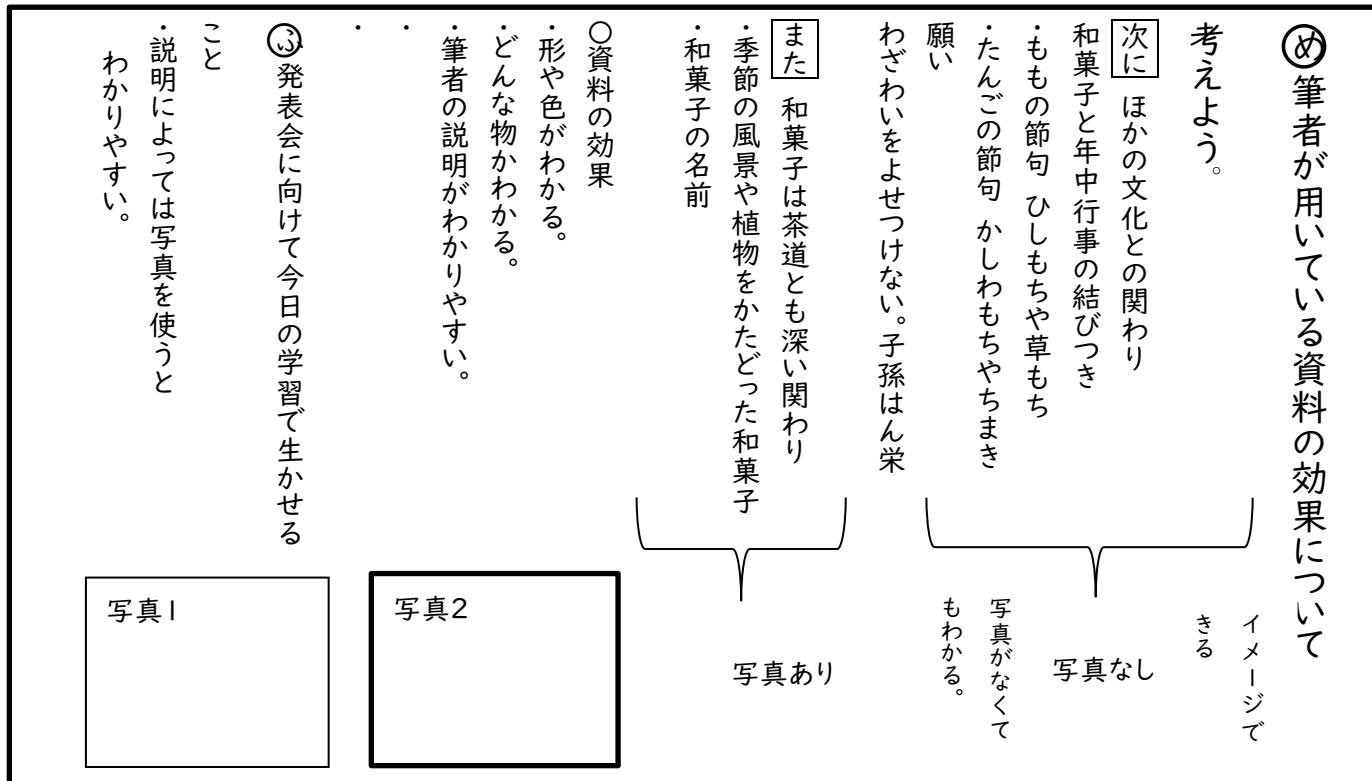
筆者が説明に用いている資料(写真)の効果について考えよう。

(2) 展開

学習過程	学習活動	指導上の留意点 (指導者の指導・支援)	学習形態	評価
構造と内容の把握	1. 前時の学習を振り返る。 2. 本時のめあてを確認する	<ul style="list-style-type: none"> 本文の説明をするときの年表がもたらす効果について振り返る 本時の課題を提示し、ノートに書かせる。 	一斉 一斉	<p>④ 筆者が説明に用いている資料(写真)の効果について考えよ</p> <ul style="list-style-type: none"> 筆者が説明していることについて読み取ることができる。
精査・解釈	3. 「ほかの文化との関わり」について書かれた文章を音読する。 4. 筆者が説明していることについて読み取る。	<ul style="list-style-type: none"> 立って自分に聞こえる声で音読し、終わったら座らせる。 接続語に注目させ、読み取させていく。 	個人 一斉	
考え方の形成	5. 筆者が用いている資料(写真)の効果について考え、書く。 6. 考えた効果を元にグループ話し合いをする。 7. 全体で共有する。 8. 写真がないところ、あるところの違いを考えさせる。	<ul style="list-style-type: none"> 「和菓子の写真」が「ほかの文化との関わり」を説明する際にどのような効果があるかを考え、書かせる。 グループの司会が話し合いを進める。 互いに選んだ理由を話し合う。 グループで出た効果を仲間分けさせる。 効果についてグループで出た意見をまとめさせる。 各グループで考えた資料の効果を発表させる。 筆者がなぜ写真を使ったり、使わなかったりしたのか考えさせる。 	個人 グループ 一斉 一斉	<ul style="list-style-type: none"> 資料の効果について自分の考えを書くことができる。 資料の効果についてグループで考えることができる。

共有	9.振り返りをする。	・資料の効果についてわかったことを振り、書かせる。	個人	・資料の効果についてわかったことを書くことができる。

10. 板書計画



III. 研究の視点

- ①基礎基本となる「ことばの力」を育成するための工夫
 - ・本文から必要な情報を見つけることができているか。
 - ②自らの考えを根拠を持って書くことができるための工夫
 - ・付箋に本文から見つけた資料の効果を書くことができているか。
 - ③自分の考えを深めるための工夫
 - ・振り返りでは、話し合いによって自分の考えを深めることができていたか。

12. 本実践の考察

(1) 基礎基本となる「ことばの力」を育成するための工夫

基礎基本となる「ことばの力」を育成するために本文から必要な情報を見つけさせることについて工夫を行った。

本文から必要な情報を見つけさせるために「次に」や「また」などの言葉に注目させ、筆者の伝えたいことがどのように書かれているのか読み取りを行った。その際、「次に」や「また」などの言葉に注目させることはできた。ただ、その後の読み取りでは授業者の発問と本文に書いてある文章の関係性を難しく考えてしまい、ノート

に自分で読み取ったことをすぐに書こうとする児童は少なかった。また、時間がたてば誰かが答えを発表し、板書を写せると考え待つ児童も多くいた。

(2) 自らの考えを根拠を持って書くことができるための工夫

自らの考えを根拠を持って書くために本文から見つけた資料の効果を付箋に書かせた。資料の効果について(1)で本文の読み取りを行ったことにより、板書やノートを見てかける児童が多かった。内容もこちらが想定していた以上のことを考える児童も数名いた。付箋に書かせたことにより、自分の考えを簡単に箇条書きに書ける児童が多かった。また、考えたことを枚数で確認することができ、たくさん考える児童の姿が見られた。

(3) 自分の考えを深めるための工夫

自分の考えを深めるために、学習の振り返りの前に児童同士で資料の効果について話し合いをし、自分の考えを深めさせた。話し合いで、(2)で自分の考えを明確に持っていたこともあり、意見の交流は活発にできていた。その効果もあり、振り返りの場面では、友だちの意見を聞いたり、話したりしたことをもとに「発表会に向けて今日の学習で生かせること」についてノートに書くことができていた。ただ、その後の全体交流では消極的な児童が多く、自分のわかったことを発表する児童は極端に少なかった。

13. 成果と課題

- 資料の効果について深く理解をしていたため、「和の文化の発表会」では、効果的な資料を選んで使うことができていた。
- ICT機器のスライド機能を活用することで、相手にわかりやすく伝えあるためには、どのような構成にするのかを話し合って決めることができた。
- 読み取りの時には、適切な接続詞をみつけることはできていたが、筆者が伝えたい重要な文章を読める児童が少なかった。また、わかっていても、間違えることを懸念し、ノートに書こうとする児童もいた。
- 教科書の本文を読むことが苦手な児童のために、本時に必要な本文だけを抜き取ったプリントやヒントカードを準備することで、もう児童の実態に応じた学習の仕方を工夫する必要があった。

国語科 学習指導案

第6学年

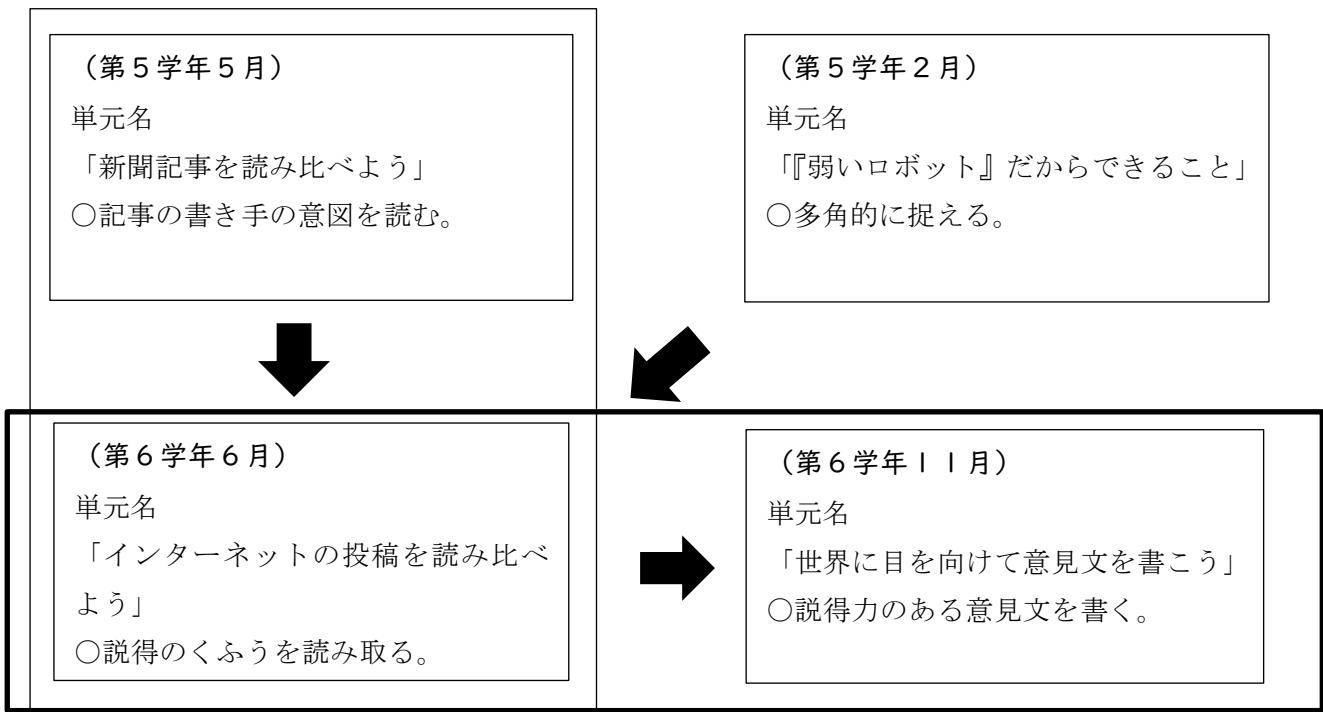
1. 日 時 令和5年6月21日(水) 第5限(13:50~14:35)

2. 学年・組 6年1組 (教室)

3. 単元名 「インターネットの議論を考えよう」

教材(「インターネットの投稿を読み比べよう」東京書籍 6年)

4. 単元間の関連と系統



5. 学習目標

- 複数の文章を読み比べて、それぞれの説得の工夫を読み取ることができる。
 - ・様々な表現の工夫に気づいている。(知識・技能)
 - ・「書くこと」において、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりしているとともに、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。(思考・判断・表現)

6. 単元の評価基準

知識・技能	思考・判断・表現		主体的に学習に取り組む態度
	読む能力	書く能力	
・様々な表現の工夫に気づいている。 …(1)ク	◎書き手は自分の考えをより適切に伝えるために、どのような理由や事例を用いることで説得力を高めようとしているのかについて考えている。…C(1)ウ	・目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりしているとともに、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。…B(1)ウ	・これまでに学習したことを振り返って学習課題を明確にし、学習の見通しを持って、積極的に説得の工夫について考え、文章を読み比べようとしている。
・情報と情報との関係付けの仕方を理解し使っている。…C(2)ア	・文章を読んで、理解したことに基づいて、自分の考えをまとめている。…C(1)オ		

7. 指導にあたって

(1) 児童観

本学級の児童は、これまで立場の違う意見や別の面から見た意見などを読み、書かれている内容を多角的に捉える学習をしている。だが、筆者の意図を意識して読み取ったり、その述べ方の工夫や効果について意識したりすることについては十分でない。そこで、これまで各教科の時間において、自分の考え方と他者の考え方の違いを意識して見たり聞いたりするように指導をしてきた。そのため、友だちの発表を聞いて自分の意見が変わったり、友だちの意見に付け足しをしたりして自分の考え方を話せる児童が増えてきた。

SNSやインターネットの活用状況は児童の中で大きく差があり、生活する中でそれらを使用している児童と、そうでない児童のイメージや感じ方も違う。また、インターネット上の交流を想定した学習経験はまだまだ少なく、これから経験を積み重ねる必要がある。

書くことにおいては、自分の考え方を話すことはできても、文章に表すとなると考え方を上手くまとめられず苦手意識を持っている。既習の漢字を使えなかったり、正しい文法で文章を書けなかったりするため、細やかな指導が必要である。しかし、昨年より、対話を通じて自分の考え方を伝える活動に取り組んだことで、相手に自分の考え方を伝えたいという意識は強くなっている。そのため、前向きに自分の考え方を書こうと手を動かし取り組んでいる児童もいる。

(2) 単元観

本教材は、インターネット上でやりとりをされる文章を想定したもので、「スポーツをすることの目的」について書かれた一つの投稿に対して寄せられた一連の投稿を紹介したものである。年齢や性別、スポーツへの関わり方などさまざまな立場の人々が参加をして議論が展開されている。文章構成、意見の述べ方、議論への参加態度なども多様であることから、それぞれの投稿を比較しながら読むことで、書かれている文章の説得の工夫を読み取ることにつながっている。本単元の「言葉の力」は、「説得の工夫」の読み取りであり、その身につけた「言葉の力」をさまざまな場で発揮できるような能力や態度を育てるこをを目指している。そして、実生活においては、インターネットの掲示板やSNSなどの情報化社会と向き合うときに必要な力となる。それは例えば、同じテーマの複数の投書を読み比べて、最も説得力があるものを選んだり、身につけた説得の工夫を生かして意見を書いて、実際に投書したりすることなどが挙げられる。他にも、実際にインターネット上の掲示板やブログ、SNSなどの情報に触れる際にも生きてくる。そのためにも相手の立場や考えだけでなく、読み手の気持ちや反応を想像しながら自分の意見を述べることができるように学習を進めていく必要がある。さらに、自分の意見や主張

の根拠になる資料を集めたり、理由付けをしたりすることが、説得の工夫や説得力のある文章を書くことにつながり、「言葉の力」を身につけることができる単元になっている。

(3) 指導観

本単元では、インターネット上に投稿されたという想定の文章を読み比べることで説得の工夫について学び、そこで身につけた力を使って、議論の続きに参加するつもりで自分の意見を投稿するという言語活動を設定している。

第Ⅰ次では、「言葉の力」を全体で確認し、議論の続きの投稿を書くという学習の見通しを立てる。インターネットの議論に参加するにあたり、インターネットと児童の生活がとても密接に関連した話題であることをしっかりと自覚させ、当事者意識を持たせたうえで学習に参加させたい。そのため、学級内でどれだけインターネットに関わりを持っているか、導入で問い合わせを行うようとする。さらに、インターネットを使って困ったことはないか問い合わせることで、書き込み方によっては誤解を生んだり仲違いが起きた事例を想起させ、自分事として捉えさせてることで、主体的に学習に取り組めるようにしたい。

第Ⅱ次では、はじめの記事に対する11の投稿に書かれた、主張や意見、その理由や根拠を中心に読み取っていく。投稿内容は三百～四百字程のものが多いので、しっかりと投稿内容を理解させるためにもじっくり読む時間を設定する。主張や意見、その根拠や理由となる文を探す際は、ペアや全体で確認をする。さらに、反復して読む時間こまめに入れることで、学習意欲を下げずに読み取りを行う。読み取りでは、主張や意見、その理由や根拠を探し教科書に線を引かせて、投稿の大まかな内容を捉えさせたい。また、常体と敬体との違いに着目させることで、話し方によって受ける感じが変わることにも気づかせたい。

本時では、最も共感できる投稿を選びその理由を書く。共感した理由を考えるときの観点を全体で共有することで、多くある投稿の中からスムーズに選べるようにしたい。さらに、理由を書く時には、児童にどんな言葉を使えば理由が伝わるのかを考えさせることで、自分の考えを書き表すことが苦手な児童への手立てになると考える。また、友だちと投稿を選んだ理由を共有することで、考え方を広げたり深めたりするなど、対話的な学習活動を開拓していく。振り返りでは、友だちの選んだ理由との相違について振り返らせることで、同じ投稿を選んでも理由は違うことに気づかせ、友だちの考え方との違いを意識して学習していくようにしたい。

次に、読み手を説得するための工夫や表現の工夫について学習する。自分の経験やエビデンスのあるデータ、常体や敬体がもたらす効果など、それぞれの投稿にある様々な工夫に着目させ、自分が意見を書いたり話したりするときに、意識できるよう指導したい。

最後に、議論に参加するつもりで自分の意見を書かせる。なかなか書き出せない児童には、「この記事に賛成か反対か」を問うことで、自分の立場を明確にして書き出せるようにしたい。理由や根拠については、一人一台端末を使って調べさせて説得力をもった多様な考えが出るようにしたい。調べた情報と結びつけることが難しい児童には、教科書の投稿に書いてあることに共感したり、引用したりさせて、理由付けができるようにする。さらに、インターネット上の議論ということを意識させ、常態や敬体によって読み手の受ける印象が変わることにも注意しながら書かせたい。また、文章が書けた後には自分で書いた文章を読み返すように声掛けをする。その時に、ひらがなばかりではなく漢字の入った読みやすい文になっているか、自分の考えが伝わっている文になっているか自分で確認させる。それにより既習の漢字を使うことや文法を意識できるようにしたい。

第Ⅲ次では、友だちと投稿を読み合い、学習の振り返りを行う。言葉の力にもあった「説得のくふう」を中心に振り返らせたい。そのため、友だちの投稿の良いところや納得したところを見つけさせ、言葉の力をより意識させたい。

8. 学習指導計画(全7時間)

次	時	学習活動	○指導・支援▲評価
I	1	○学習課題をつかみ、学習の見通しを立てる。	○「説得のくふう」を考えながら、インターネットの投稿を読み比べていくことを確認させる。 ▲C(1)ウ
II	2	○投稿を読み、意見や主張と、その理由や根拠を読み取る。	○p78~81の議論を読み、大まかな議論の流れを読み取らせる。 ▲(1)ク ○それぞれの投稿の意見や主張、理由や根拠に着目して、教科書に印をしたり線を引いたりする。 ○記事に対して、それぞれの投稿の立場がどうなっているか整理する。 ▲C(2)ア
	3		○共感できる投稿を探すときの観点(ポイント)を確認させる。 ○共感できる投稿とその理由を書かせる。 ▲B(1)ウ
	4 本時		○投稿の大まかな構成と使いたい説得の工夫について捉えさせる。 ○投稿のさまざまな表現に着目させる。 ▲C(1)ウ
	5		○説得の工夫や共感の工夫を意識して、自分の投稿を書かせる。 ○自分の投稿を書いて、自分が工夫したことや意識したこと振り返らせる。 ▲B(1)ウ
	6		○友だちの投稿を聞いて、共感したところや納得できたところがあったかを考えさせる。 ○今回の学習で、どんなことができるようになったのか、友だちの投稿の良かったところを振り返らせる。 ○友だちの投稿を再度確認させたり、メモさせておくことで、スムーズに振り返りができるようにする。 ▲C(1)ウ
III	7	○投稿を読み合い、学習を振り返る。	

9. 本時の学習(4/7時)

(5) 目標

- 自分が最も共感した投稿を一つ選び、その理由を説明することができる。

(6) 展開

学習過程	学習活動	指導上の留意点 (指導者の指導・支援)	学習形態	評価
構造と内容の把握	<p>1. 本時のめあてを確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> ㊂ 共感した投稿を選んで、理由を話そう。 </div> <p>2. 納得した理由を考えるときの観点を確認する。</p>		一斉	
精査・解釈考え方の形成	<p>3. 投稿の内容を読む。</p> <p>4. 共感した投稿を選び、その理由を書く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> じっくり読ませるが、時間内に読めない児童に対しては、主張や意見とその理由や根拠を中心に読むよう指示する。 できるだけ多くの観点を入れて、理由を書くよう指示する。 「なぜか」というと～からです。」のように理由を話すときの言葉を考えさせる。 早く書けた児童は他の投稿についても同様に考えさせる。 	一斉 個別	<ul style="list-style-type: none"> 説得の工夫を読み取ったり、表現の仕方に着目したりすることができる。 観点を理解して、共感した理由を書くことができる。
共有	<p>5. 選んだ投稿とその理由をペアで話しあう。</p> <p>6. 全体で発表する。</p> <p>7. 学習の振り返りをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 聞き手が、自分の理由との共通点や相違点を意識しながら聞けるよう促す。 「説得の工夫」にあたる言葉に線を引き着目させる。 友だちの理由との違いや、共感できる理由について書かせる。 	ペア 全体 一斉	<ul style="list-style-type: none"> 友だちの考え方との違いを意識して書くことができる。

10. 板書計画

- ⑥ 共感した投稿を選んで、理由を話そう。

- 理由を考えるときのポイント
・どんな主張や意見なのか。
・どんな理由や根拠なのか。

- ## ○理由を述べるときの言葉

- ・なぜかと「い」と「なぜなら」のため「い」と比べて
・よりの方が「いだから」と思いました。理由は「

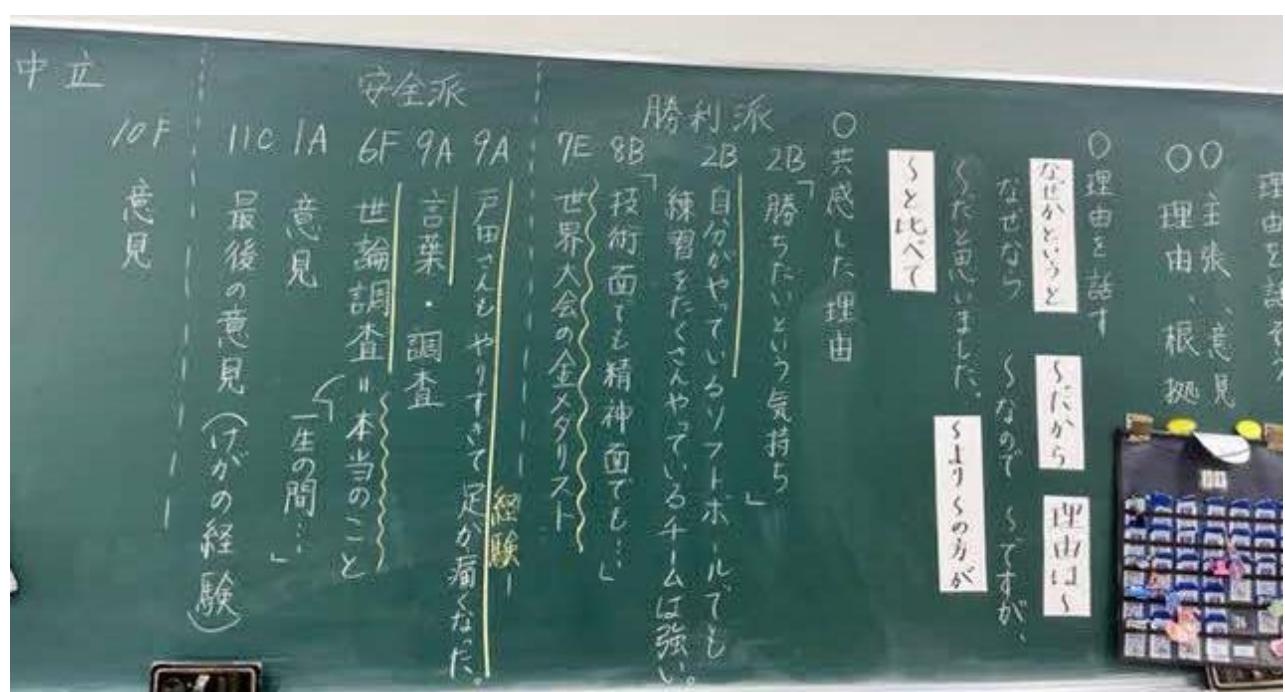
- ## ○納得した投稿

- 健康 3C 6F 9A 11C 自分の経験を話しているから。
世論調査で%を使っているから。
有名な言葉を使っているから。
自分の経験を話しているから。

- 勝利
8B 7E 4D
自分の経験を話しているから。
有名人の言葉を使っているから。
一流選手のことを話しているから。

- 中立 5E スポーツの目的が違うと話しているから。
10F 勝利を目指すが、指導する人がケガに注意すればよいと言っているから。

- ⑤友だちの理由との違いや、同じところはあったのか。
それらを聞いてどのように思ったのかを書く。



III. 研究の視点

①基礎基本となる「ことばの力」を育成するための工夫

- ・納得した理由を相手にわかりやすく整理して書くことができているか。
- ・投稿を読んで、文体の特徴や内容の読み取りを的確にしているか。

②自らの考えを根拠を持って書くことができるための工夫

本文に線を引いたり四角で囲んだりすることで、そこに着目して自分の考えを書くことができていたか。

③自分の考えを深めるための工夫

振り返りでは、「この時間で分かったこと」、「友だちとの考え方の相違で気づいたこと」の視点で書かせる。そのためにわかりやすく板書をまとめたり、児童の意見の共有を図ったりすることができていたか。

12.本実践の考察

(1)基礎基本となる「ことばの力」を育成するための工夫

国語科の学習では、相手意識をもって話すことを重視して指導を続けた。自分の意見を書くときは他者に読んでもらっても読みやすいように書くことを意識させたり、話し合いをするときは相手に伝わりやすい言葉を選んだりしながら話すように声掛けをした。教材文を読むときは、意味調べや読み方の確認だけでなく、学習のめあてにそって目的を明確にしてから読むようにした。

本教材は、インターネット上でやりとりされる文章を想定したもので、この世代の児童たちにとってインターネット上という状況は馴染みのある場面設定であった。しかし、スポーツの経験が少ない児童、スマートフォンやパソコンを持っていない児童がいることやネット上の投稿に対して知らない人物と議論する経験は少ない児童が多いことなど、意欲的に学習させるために配慮すべき点がいくつかあった。そこで本単元のはじめに、投稿にある「232球投げぬいた」ことが、一般的なことと比べてすごいことを示したり、これからネット社会と付き合っていくなければならないことを指導したりして、意欲的に学習できるようにした。

(2)自らの考えを根拠を持って書くことができるための工夫

国語科の学習で、自分の意見や考えを持つときは毎回根拠をもたせるために、教科書に書いてあることを根拠にさせたり、自分や他者の経験を根拠にさせたりした。なかなか根拠をもつことができず、なんとなく意見を書いている児童や根拠を話すことはできても書くことは難しい児童もいた。そのため、教科書に線を引いたり、話し合いをするときに、自分の意見とその根拠を合わせて話せるような場面を設定したりした。

本単元では、教材の記事に対し納得できるかどうかという視点で学習を進めた。まず、記事に対する11の投稿を「勝利派」「安全派」「中立派」の3つに整理した。次に、整理したものをワークシートにして、自分がどの分類の投稿に納得したのかはっきりさせた。そうすることで、納得した根拠を考えられるようにしたり、自分の考えをぶれずに持つことができるようになしたりした。

(3)自分の考えを深めるための工夫

本教材は、インターネット上でやりとりされる文章を想定したもので、この世代の児童たちにとってインターネット上という状況は馴染みのある場面設定であった。しかし、スポーツの経験が少ない児童、スマートフォンやパソコンを持っていない児童がいることやネット上の投稿に対して知らない人物と議論する経験は少ない児童が多いことなど、意欲的に学習させるために配慮すべき点がいくつかあった。そこで、本単元のはじめに、投稿にある「232球投げぬいた」ことが、一般的なことと比べてすごいことを示したり、これからネット社会と付き合って

いかなければならないことを指導したりして、意欲的に学習できるようにした。

本単元だけでなく国語科全体を通して、考えの交流をする機会を増やした。その中でも、自分の意見との相違については、毎回意識するよう声掛けをした。考えに違いがあるときは、ノートにその考えを追記させたり、自分の考えの変容を書かせたりした。

II. 成果と課題

- 納得した理由を書かせる時間設定を十分にとることで、経験や数値など具体的な理由を持つことができた。
- 理由を話すときの言葉を確認することで、自分の意見をスムーズに書くことができた。
- 児童の意見を板書する際、複数ある意見や同じ意見でも理由に違いがある場合など、線で囲んだりつないだりして意見を整理する必要があった。
- 「納得」という言葉で学習を進めたが、「共感」という言葉で学習を進める方が、自分の経験と結び付けたり有名人の経験を理由付けにしたりすることができたと感じる。

1. 日時　日程　　令和6年 2月27日 2時間目(9:55~10:40)

2. 学級・学年　　第2学年～第5学年 8名

(第2学年…4名 第4学年…3名 第5学年…1名)

3. 場所　　1階 なかよし教室

4. 単元名　「おすすめの献立！」

5. 単元目標

○たて割り集団で行う活動を通して、協力することや共同学習のよさを実感することができる。(コミュニケーション)

○ルールを知り、友だちと一緒に楽しく活動することができる。

○考えや思いを自分なりに分かりやすく相手に伝えようとすることができる。(国語科)

6. 指導にあたって

(1) 児童観

本学級には、1年生から6年生の児童が在籍しており、学習の定着度や障がいの程度は個々で異なる。国語科の学習においても、同学年の児童でも読み書きの定着度や理解度が違う。そのため、児童は、それぞれの実態に合わせて、個別に学習をしたり、複数で学習をしたりと、学習形態は様々である。また、異学年であっても学習の段階が同じであれば、一緒に考えたり伝えたりするために、共に学習をすることもある。また、教科書を活用して学習する場合は、個に応じたヒントを見たり、声掛けをしたりすることで、指導者が個別に支援を行い、児童それぞれが前向きに学習に取り組んでいる。特に、文字については、ひらがな50音を全て覚えていない児童がいたり、文字を文字として認識し始めたばかりの児童がいたり、字を書くことに苦手意識を持つ児童がいたりする。それでも、ひらがなのカルタやカード、タイルなどを活用し、遊びを通してひらがなの定着を図っている。また、学習中や休み時間の児童の様子を見ると、4月当初に比べて、相手を意識して、一緒に学習ができるようになってきたことがわかる。授業で気付いたことや思ったことを一緒に学習している児童に言ったり、休み時間にたわいもない話で盛り上がったりしている。また、自ら話に参加しようとする姿や友だちの話を聞こうとする姿も見られる。しかし、児童が一方的に話しかけることもあり、思っていることを充分に言葉で表現できているとは言えず、まだまだ話し合う練習が必要である。

学校生活の中で、給食はどの児童にとっても楽しみな時間になっている。しかし、ご飯は食べられてもパンが苦手な児童がいたり、牛乳を一口しか飲まない児童がいたり、苦手な食べ物がある児童が少なくはない。それでも、栄養教諭の給食指導により、「苦手な物でも一口は食べよう」という気持ちが育っていたり、日々の担任の指導によって、「できるだけ残さずに食べよう」と努力していたりする。また、1時間目から、「今日の給食は何?」と言って、献立の日めくりカレンダーをじっと見る児童がいれば、「やった! 今日好きな給食や!」と言って献立を見て学習の意欲を高めたりする児童もいる。

(2) 単元観・指導観

本単元の「おすすめの献立！」は、たてわり班に分かれて、おすすめの献立を一緒に考える学習である。人によって、好きな食べ物や苦手な食べ物が違うため、班のみんなで食べたくなるような献立にするためには、自分の思いや経験を相手に伝えたり、相手の話を聞いたりするという言語活動が必要である。また、献立を考えるとき、「好きだから」「おいしいから」といった理由がたくさん出てくると予想される。友だちと献立を楽しみながら考えることを通して、コミュニケーション能力を向上させることがこの学習のねらいである。指導要領では、以下の項

特別支援学校指導要領

○自立活動

(3) 人間関係の形成 ア 他者とのかかわりの基礎に関すること

(6) コミュニケーション ウ 言語の形成と活用に関すること

○国語 A聞くこと・話すこと

1段階 イ 身近な人からの話し掛けに注目したり、応じて答えたりすること。(低学年)

2段階 ア 身近な人の話に慣れ、簡単な事柄と語句などを結び付けたり、

語句などから事柄を思い浮かべたりすること。(低学年)(中学年)

3段階 イ 経験したことを思い浮かべ、伝えたいことを考えること。

ウ 見聞きしたことなどのあらましや自分の気持ちなどについて、

思い付いたり、考えたりすること。(中学年)(高学年)

目に該当する。

本活動では、それぞれの班に担当の指導者を一人配置し、必要に応じて声をかけることで、児童同士の話し合いが活発になるようになる。また、上級生の児童を中心として、それぞれの児童が主体的に活発な言語活動を行えるように、各班担当の指導者が児童同士の話し合いを進行するような発言はできるだけ控えるようにする。特に、来年度高学年や最高学年になる児童については、指導者に頼らずに各班でリーダーシップを發揮させることで、上級生としての自覚を芽生えさせられるようにしたい。

「献立を考える」と一言で言っても、児童によっては献立をイメージしにくい場合がある。そのため、授業のはじめに、日頃みんなが食べている給食の写真を見せることで、献立のイメージを持ったり、自分たちで考えようとする意欲を高めたりすることに繋げる。また、献立を考えさせるとときは、実際に食べている給食以外の食べ物でもよいことを伝えて、献立の自由度を広げさせたい。食べ物を選ぶときは、「〇〇が好きだから」「〇〇な味がしておいしいから」など、具体的に理由を付けられるようにする。そのため、話し合いの前に、指導者が献立を選ぶときの例を1つ示すようにする。発言が難しい児童が意欲的に活動に参加できるように、写真やイラストや食べ物の名前等を記したヒントカードを活用し、自分の思いを伝えやすい環境をつくる。(おすすめの献立を考えるときには、栄養バランスを意識する班があってもよいと考える。しかし、栄養バランスについては、あくまでも話し合いをするためのきっかけの一つとしているため、本授業では栄養バランスに関して深くこだわらない。)班で献立を決めた後は、おすすめポイントを班のみんなで考えるようになる。そして、他の班に献立を発表する時に、おすすめポイントも伝えるようにすることで、みんなで楽しく学習を振り返るための手立てとしたい。

学習の振り返りでは、話し合いのときにしっかりと相手の話を聞いていたかどうか、学習のルールを守れたかどうか確認させる。さらに、他の班の考えた献立で食べたいと思ったものはどれか、また、その理由や感想などをみんなで共有することで、学習を振り返られるようにする。

7. 本時の学習

・本時の目標

- ・たてわり班で、ルールを守って楽しく活動することができる。
- ・考え方や思いを自分なりに分かりやすく相手に伝えようとすることができる。

・本時の展開

学習活動	○指示や支援 ★発問や発言
1. 本時の学習のめあてを確認する。 ・普段の給食を思い浮かべて、「献立」をイメージする。	<p>○班ごとに座り、静かに話を聞けているかどうか確認する。 ★「学校では、どんなものを食べていますか。」 ○日頃の給食を思い出させて、献立を考える見通しを持たせる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">グループのみんなで こんだて を かんがえよう!</div>
2. 班で話し合って、「献立」を考え、発表し合う学習を行う。 ① 活動の内容やルールを知る。 ・話し合いのルールを知る。	<p>○指導者がつくった献立の例を示す。</p> <p>○給食の献立を班のみんなで考えたり、他の班に発表したりすることを伝える。 ○「友だちの話をしっかりと聞く。」「みんなが楽しめるように、友だちの意見を大切にしながら話し合う。」ことなど、話し合いのルールを伝える。 ○普段の給食では出ないメニュー組み合わせでもよいことを伝える。</p> <p>★「どんな献立がよいか、班で話し合って考えましょう。」</p>
② どんなメニューを献立に入れるか班で考える。 ③ 他の班に自分たちの考えた献立を発表する。	<p>○話し合いで困っている班には、指導者が助言して高学年を中心に話し合いをすすめられるようにする。 ○一人一人の意見を大切にしながら話し合いができるように助言する。 ○必要に応じてイラストなどを活用し、個別に支援する。 ○そのメニューを選んだ理由も伝えられるようにする。 ○できた献立の「おすすめポイント」を班で考えるよう声をかける。</p> <p>★「どんな献立を考えたのか、他の班の発表を聞いてみましょう。」</p> <p>○他の班の発表をしっかりと聞けるように声をかける。</p>
3. 本時の振り返りをする。	<p>★「食べてみたいと思った献立はありますか。」「理由も言ってください。」 ○みんなで学習内容を振り返られるようにする。 ★「友だちの話をしっかりと聞けましたか。」 ○話し合いのときのルールを守ることができたか確認させる。</p>

8. 板書計画

(ホワイトボード 1枚目)

め グループのみんなで こんだてを かんがえよう！

◎はなしのルール
①ともだちのはなしを
しっかりきく。
②ともだちに つたわる
ように はなす。
③なかよく はなしあう。

◎おすすめポイント
・〇〇がいいとおもいます。
・なぜなら、〇〇だからです。

(ホワイトボード 2枚目)

め グループのみんなで こんだてを かんがえよう！



9. 研究の視点

- ① 基礎基本となる「ことばの力」を育成するための工夫
 - ・実際のメニューの写真や、おかず単品の写真を準備することで、具体的に献立を考えられるようにする。
 - ・視覚支援をすることで、言葉で説明されたことを具体的に見ることができるようになる。
- ② 自らの考えを根拠を持って書くことができるための工夫
 - ・「〇〇が良いと思います。なぜなら～」という話型や、おすすめポイントを書かせてることで、根拠をはっきりさせるようになる。
- ③ 自分の考えを深めるための工夫
 - ・全体交流時に、相手のグループの献立から自分の考えと比べる時間作るようにする。

10. 本実践の考察

(1) 基礎基本となる「ことばの力」を育成するための工夫

具体的なイメージがわかるように、給食の献立の写真を準備し、視覚的にわかりやすいように支援を行った。そして、メニューを考える際にも、おかず単品の写真を準備し具体的なメニューを考えられるようにした。そのため、児童は意欲をもって自分の好きなメニューや食べたいおかずなどの名前で伝えることができた。また、写真があるため、そのメニューの好きな理由を「おいしい」「好き」以外に「しゃきしゃしているから」「みずみずしい」などの具体的な表現ができた児童の言葉の意味を他の児童がイメージしやすくなかった。

(2) 自らの考えを根拠を持って書くことができるための工夫

話型を活用することで、児童が自分の思いの説明がしやすくなかった。また、しっかりと理由を考えるための意識づけにもなっていた。写真があったことで、「ここが好き!」と言う部分を具体的なイメージをもって考えることができた。そのことが、「おいしい」「好き」以外の「カラットしていて」「野菜がたくさん入っている」などの具体的な表現につながる言葉を引き出すきっかけとなった。

(3) 自分の考えを深めるための工夫

最後の全体交流では、他の班が作ったメニューでおいしそうと感じたおかずを考える時間を作った。その瞬間に、相手の班の発表した内容を意識した児童の姿が見られた。「この中ではどれかな?」と条件を付けたことで、自分で考える時間を作ることにつながった。

11. 成果と課題

- 班の話し合いで、話型の準備をしたことでの自分の意見と理由をしっかりと話すことができた。
- ルールをわかりやすく提示をし、何度も伝えたことにより、ルールを守り楽しく話し合い活動に取り組むことができた。
- 全体交流の場では、手を挙げてほぼ全員が発表をすることができた。特に低学年の児童が積極的に発表することができた。
- 班での話し合い活動の時間では、児童一人ひとりに対する支援が不十分な部分があった。
- 全体発表をするときに、発表ができない児童がいた。全員が発言しやすくするための発問や声掛けが必要であった。
- 積極的に話すことはできるが、友だちの意見を聞こうとすることが苦手な児童が多かった。今後の学習において、話すことだけではなく、聞くことに慣れていく必要がある。

III 研究のまとめ

I. 研究の成果

○基礎基本となる「ことばの力」を育成するための工夫

ペアやグループで意見の交流を行うときには、話型を活用し工夫をしたことで、自分の気持ちを分かりやすく相手に伝えようとする意識の高まりがみられた。また、音読の工夫をしたり、ICTなどを活用したり、視覚化をしたことで、伝えたい様子をより具体的にイメージをして言葉で表現し、共有をしようとする様子も見られた。

○自らの考えを根拠を持って書くことができるための工夫

教科書に線をひいたり、自分の考えを付箋にメモを書いたりすることで、自分の考えの根拠をはっきりさせることができた。また、筆者に対する自分の意見の立場を明確にすることが根拠につながったこともある。

○自分の考えを深めるための工夫

振り返りの視点を明確し、学習時間に分かったことや、友だちの意見から考えたこと、次に活かすためにはどうすればよいのか、などについて書いたことにより、自分の考えを深めることができた。また、その意見を交流することで、さらにもう一段階考えを深めることにもつながった。

2. 今後の課題

●基礎基本となる「ことばの力」を育成するための工夫

自分の気持ちや、考えをより的確に表現するための語彙力や、まとめる力をまだまだつける必要がある。

●自らの考えを根拠を持って書くことができるための工夫

根拠を明確にして自分の考えを伝えるために、相手意識を持って文章を書く必要がある。

●自分の考えを深めるための工夫

児童の考えを基にして、板書を構造化することで、学習の振り返りにつながるような工夫が必要である。

おわりに

本校は令和3年度より研究教科を国語科に設定し、本校児童の課題である「書く力」を育成するための前段階として、説明的な文章を通して「読み取る力」の育成に取り組みました。また研究主題を「主体的に考え、意欲をもって共に学び合う子どもを育てる」と掲げ、アクティブラーニングの観点における「主体的・対話的な学び」に焦点をあて、取り組みました。

令和4年度は、本校児童の課題である「書く力」の育成をめざし、昨年度の取り組みより生じた課題である「学習活動に対する時間配分の工夫」、「対話的なルールづくりの工夫」、「深い学びにつなげる振り返りの工夫」を研究の視点の柱とし、対話的な学びから深い学びにつなげる研究に取り組みました。

今年度も、引き続き、本校児童の課題である「書く力」の育成をめざし、昨年度の取り組みより生じた課題である「基礎基本となる『ことばの力』を育成するための工夫」、「自らの考えを、根拠を持って書くことができるための工夫」、「自分の考えを深めるための振り返りの工夫」を研究の視点の柱とし、対話的な学びを活用した確かな読みをもとに、進んで表現できる力をつけることで、さらに深い学びにつなげる研究に取り組んでまいりました。

その結果、まずは、相手意識を持った伝え方の工夫が、さらなる書く活動の充実につながりました。次に、明確な目的をもった振り返り活動により、児童一人ひとりがその時間に学習したことに対して自分の考えを深めることができました。さらに、その積み重ねが自己肯定感となり、確かな学力へとつながりました。また、校内においても、研究を通して、若手、中堅以上の教職員はもとより、経験年数に関係なく活発な会話が生まれました。そして、研究部を中心に、全教職員が共に協力し、励ましたり助言したりするなかで、一丸となって主題に向かって邁進することができました。学習を通して、児童も教職員も、主体的・対話的で深い学びを進めることができたのが、今年度の研究の大きな成果だと感じます。

今年度の成果と課題を活用し、国語科における「東井高野スタイル」が確立できるよう、さらに研究を深め、教職員一丸となって取り組みを進めてまいります。

最後になりましたが、大阪市教育センター学力向上推進指導員の高砂和滋先生には年間を通して、専門的な見地からご指導いただきまことにありがとうございました。今後もより一層のご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申しあげます。

教頭 橋本 功士